

市立函館博物館

研究紀要

第 12 号

2002

市三函館博物館

研究紀要

第 12 号

2002

序

このたび『市立函館博物館研究紀要』第12号を刊行する運びになりました。

本号の巻頭には「函館市および周辺部のエゾアカガエル*Rana pirica*の分布—2001年の記録を中心に—」と題し、函館山ふれあいセンターの木村マサ子氏と当館の佐藤理夫学芸員の両氏による調査報告を掲載いたしました。

今回の調査報告は、函館市とその周辺で得られたエゾアカガエルの生息情報を基に函館山を中心とした実態調査を交え、その生息分布状況をまとめられたもので、年々その生息数の減少が危惧されているヒキガエルと共に自然環境保護の観点から見ても貴重な報告と思われれます。

次に「函館市北方民族資料館 13年の歩み」と題して、同館の渡辺文子学芸員による資料館紹介、展示紹介と併せ、来館者のアンケートから課題を拾い出し、展示や主催事業に対して今後の方向付けを試みたものです。この報告が示すように、世界的にも評価の高い馬場・児玉両コレクション等を有する同資料館が入館者や利用者にとって、さらにその存在価値の大きさを認識して頂けるような事業展開に期待したいものです。

次に当館の霜村紀子学芸員による「函館におけるデザイン団体の活動について」は、今まであまり触れられることのなかった函館における商業デザイン活動を取りあげた意欲的な研究報告です。報告では、戦後の活動を中心に戦前や戦時統制下における関係者の活動の歴史にも触れ、特に戦後から昭和40年代におけるめざましい経済復興の中での日本の商業美術の発展の経緯を読み取ることが出来、当時のデザイン活動に対する関係者の意気込みやすさまじい熱意が感じられます。

ともすれば見逃しがちな1枚のポスターにもその時代背景を推察すればその見方も自ずから変わって来るものであり、今回の研究内容により明らかになった関係者の熱意にあらためて敬意を表したいと思います。

終わりにあたりまして、関係各位におかれましては今後とも当館に対しまして忌憚のないご意見・ご提言を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成14年 3月31日

市立函館博物館長

澤 口 喜 一

目 次

序

函館市および周辺部のエゾアカガエル *Rana pirica* の分布

—2001年の記録を中心に—

佐藤 理夫・木村マサ子 …………… 1

函館市北方民族資料館 13年の歩み

—現状と今後の課題—

渡辺 文子 …………… 9

研究ノート

函館におけるデザイン団体の活動について

—函館宣伝美術会の結成を中心に—

霜村 紀子 …………… 25

函館市および周辺部のエゾアカガエル *Rana pirica* の分布

—2001年の記録を中心に—

佐藤理夫*・木村マサ子**

1. はじめに

現在、北海道に自然分布しているカエルはニホンアマガエル *Hyla japonica*・エゾアカガエル *Rana pirica* の2種が（前田・松井 1989）、持ち込まれた種としてアズマヒキガエル *Bufo japonicus formosus*・ツチガエル *Rana rugosa*・ウシガエル *Rana catesbeiana*・トノサマガエル *Rana nigromaculata*・トウキョウダルマガエル *Rana porosa porosa* が知られている（白井 1989、竹中 1993、1997、齊藤ら 1996、1997b、1998、齊藤・有田 1997a、出羽ら 1997、齊藤 2001、環境省自然環境局生物多様性センター 2001）。このうち、北海道南西部（道南）にはアズマヒキガエル・ニホンアマガエル・エゾアカガエル・ウシガエルの4種が分布する（白井 1971、1989、1993）。

4種のうちエゾアカガエルの分布については、まだ不明なところが多く、環境省自然環

境局生物多様性センター（2001）でまとめられた『生物多様性調査 動物分布調査報告（両生類・爬虫類）』—1997年～1998年にかけて実施された調査に基づく報告書—では、「北海道の分布の空白を埋める、多くの地域からの記録が報告された。」としているが、北海道南西部での分布が、駒ヶ岳周辺部と松前、他に数ヶ所があるだけで、他のほとんどの地域で記録がいまだ空白のままである（図1）。しかし、これは未生息なのではなく、生息情報が得られなかったためと思われる。この点を補う意味で、2001年に本種の分布に関する貴重な情報が数件得られたので、以下にまとめて報告する。

2. エゾアカガエルの生息情報

2001年3月から6月までに函館市及び周辺部で得られた情報は以下のとおりである（図2）（図3）。

3月20日～31日 渡島管内七飯町本町①にて卵塊を確認。（田中正彦）

3月26日～4月6日 渡島管内戸井町原木川②で産卵を確認（3月26日ではまだいなかったため、この間に産卵された模様）。合計5卵塊を確認。（今 博計）

4月5日 函館山中腹にある旧函館要塞跡③でエゾアカガエルがみられ始める。

4月7日 渡島管内七飯町上軍川④で残雪上に卵塊を形成していない卵を確認。（野田隆史）

4月8日 函館山の麓の〈カエルの池（人工池）〉⑤で1卵塊を確認。松倉川上流部⑥で数卵塊を確認。（野田隆史）

4月10日 渡島管内七飯町藤城⑦で卵塊を確認。（田中正彦）

4月11日 函館山中腹にある旧函館要塞跡の水たまり1箇所確認（写真1）

- (写真2)。もう1箇所ではエゾアカガエルを確認。
- 4月12日 函館山の麓の〈カエルの池〉でエゾアカガエルを確認(写真3)。函館公園(函館市青柳町)⑧の〈ひょうたん池〉で成体と卵塊を確認(写真4)。〈北海池〉では卵塊だけを確認。函館市見晴公園(函館市見晴町)⑨で産卵確認。
- 4月20日 函館山麓の〈カエルの池〉で幼生(オタマジャクシ)を確認。
- 5月12日 渡島管内上磯町茂辺地盤の沢・函館教育体験の森⑩で幼生を確認。(田中邦明)
- 5月13日 松倉川中流部⑪で幼生を確認。(田中邦明)
- 6月10日 ⑫渡島管内木古内町大釜谷で幼生を確認。(田中邦明)
- 7月15日 ⑬函館市白石町の函館市オートキャンプ場の人工池周辺で幼体(子ガエル)を確認(写真5)。

※ () は情報提供者。記載の無いのは筆者。



図1. 両生類・爬虫類分布図—エゾアカガエル—
 (『生物多様性調査 動物分布調査(両生類・爬虫類)』より一部使用)

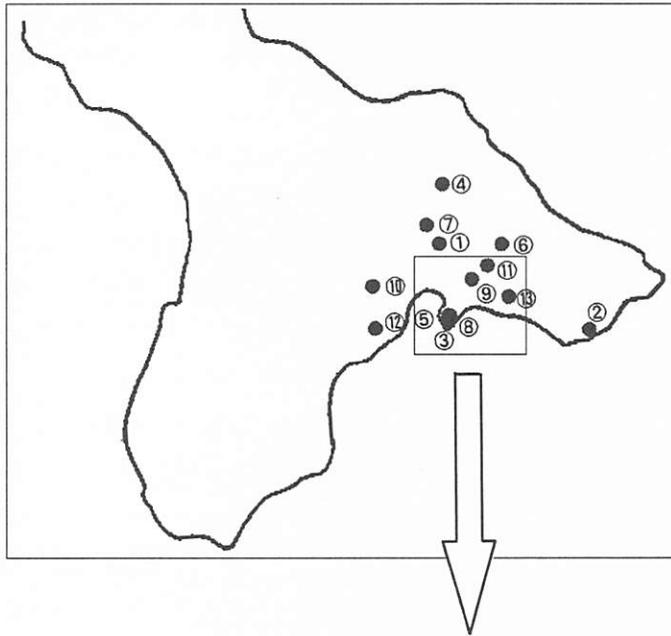


図 2. 2001年の函館市および周辺部におけるエゾアカガエル観察地点



図 3. 2001年の函館市内におけるエゾアカガエル観察地点
(函館市全図 5 万分の 1 地形図 函館市土木部 平成 5 年 3 月作成 より一部使用、部分変改)

エゾアカガエルの特徴については、前田・松井 (1989) に詳しいので、ここでは説明を省くが、竹中 踐氏 (北海道東海大学教授) によれば、本種は「雪解け直後に産卵する。」

(私信) ため、3月下旬～4月中旬の時期を逃すと見落としてしまうおそれがあり、このことが、今まで情報の盲点となっていたのかもしれない。しかし、本種は、「雪解け後しばらく産卵が続く。」ことと、「多数の卵が集まって球状に近い卵塊を形成する。」(竹中 1993) といった特徴を示すことから、繁殖期には注意すれば発見しやすい種類と思われる。繁殖期は、上記の説明のとおり、函館市及び周辺部ではほとんど同じ時期となり、この時期に集中して調査すれば、生息場所はさらに増えるものと思われる。

3. 函館山のエゾアカガエルの生息情報

函館山で生息するカエルとしてアズマヒキガエルがよく知られている(前田・松井 1989) が、それ以外にニホンアマガエルが「函館山表側の山麓一帯に生息」している(白井 1971、1989、1993)。しかし、エゾアカガエルについて、白井(1971、1989、1993) は「函館山に生息しない」と述べていた。ところが、2001年に旧山道沿いの中腹2箇所と函館公園を含む麓の3箇所で成体と卵塊を確認できた。

棟方(1985) は、エゾアカガエルについて次のように述べている。

産卵場所は確認していないが、恐らく旧要塞の頃の建物跡地に点在するコンクリート製の水たまりや八幡宮の池ではないかと考えられる。成体はカシワ、ミズナラやスギなどの高木林の草本層に生息し、小昆虫を捕食している。

この文章から、函館山に以前から本種が生息したことが読みとれる。しかし、この文章だけで1980年代に本種が確実に生息している

か否かを判断するには根拠が乏しいように思える。一方、白井 馨氏(元北海道理科教育センター) の報告(1971) が、「1966年より、函館付近の両生類を採集し……」と述べているとおり、カエルの分布を調べるために北海道函館西高校の「生物顧問として、生徒といっしょに函館山……」を調査した結果に基づいたもの(私信)、であることは、年代的にみて函館山での4月の観察が困難であったことなどに注意を払う必要がある。ただし、2001年のエゾアカガエルの観察記録が、棟方(1985) が指摘したとおり「旧要塞の頃の建物跡地に点在するコンクリート製の水たまり」であったことは、本種の生息が当時から私信として伝えられていたことがうかがえる。後に、棟方明陽氏(元北海道教育大学函館校教授) は、実際に「産卵は確認していないが、オタマジャクシを採集した。」と述べている(私信)。ちなみに「コンクリート製の水たまり」とは〈旧要塞〉当時使用された〈貯水槽〉や〈厠〉であろう(井濶 2000)。

実は、1992年から毎年、3月末～4月上旬に函館山の中腹にある〈旧要塞〉の〈貯水槽〉や〈厠〉いわゆる便槽で成体も卵塊も確認していた(木村 未発表)。ただし、その頃は、カエルを捕らえて観察したわけではなく、その時は「ヒキガエルとは違う」と思っただけで、卵塊の形状だけで種類を把握するまでにはいたらなかった。さらに、同年4月に撮った函館山の野鳥観察小屋敷地内にある人工池の写真のなかに、明らかにエゾアカガエルのものと思われる卵塊が写っているのを見つけた(佐藤 未発表)(写真6)。ほかに、「八幡宮の池ではないかと考えられる。」(棟方 1985)、とした点に関しては、2001年には成体も卵塊も観察できなかった。また、麓にある〈カエルの池(人工池)〉(写真7)

についても、1999年頃から「ヒキガエルとは違う」種類のカエルと「2種類のオタマジャクシがいる」（木村 私信）ことは気づいていたようだが、ここでも種類の把握までにはいたらなかった。しかし、この池ではそれ以前は確認されていないことから、少なくとも2年ほど前までは産卵していなかったようである。ただし、函館公園内の〈ひょうたん池〉と〈北海池〉については、今回が初めの記録と思われる。

以上の点から、以前からエゾアカガエルが生息していたのは確実と思われるが、麓に分布を広げたのは、少なくとも2年ほど前からではないかと思われる。いずれにしても、今回の記録は、エゾアカガエルの生息を明確にした点で貴重であると思われる。函館公園内での記録については、函館山の麓にあることから、ここでは函館山の記録として扱った。

4. 函館山を除いた市内の生息情報

函館山を除く函館市の松倉川、鱒川、見晴公園、白石町オートキャンプ場が生息地として記録された。他に、環境省の記録には無かったが、白井（1989）は「郊外に出ると海岸地帯を除いて、広く分布し、函館市赤川町一帯の水田、水溜まり……」と述べている。さらに、1999年に亀田中野町で本種の生息が確認されている（北海道都市施設事務所他 2000）。これらの記録は、ほぼ函館市の東部に位置し、エゾアカガエルの生息地の分布を知る上で貴重である。

5. 函館市を除く北海道南西部の生息情報

図1が示すとおり、函館市以外では、今まで駒ヶ岳周辺及び松前町周辺さらに八雲町などで記録があるが、ほとんどの地域で分布が空白となっている。今回、渡島管内の戸井町



写真1. 〈旧要塞〉跡の〈厠〉（2001.04.11撮影）



写真2. 〈旧要塞〉跡の〈厠〉で見られたエゾアカガエルの卵塊（2001.04.11撮影）



写真3. 〈カエルの池〉で確認されたエゾアカガエル（2001.04.12撮影）

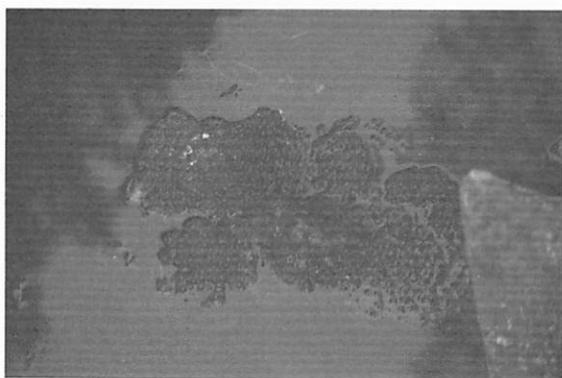


写真4. 函館公園〈ひょうたん池〉で見られたエゾアカガエルの卵塊 (2001.04.12撮影)



写真7. 函館山の麓にある〈カエルの池 (人工池)〉 (2001.04.11撮影)



写真5. 函館市オートキャンプ場の人工池で見られたエゾアカガエル (2001.07.15撮影)



写真8. 麓の〈カエルの池〉でみられたヒキガエルの卵 (2001.04.20撮影)



写真6. 函館山野鳥観察小屋敷地内にある人工池で見られたエゾアカガエルの卵塊 (1991.04撮影)



写真9. 函館八幡宮の〈勾玉の池〉に集まるヒキガエル (2001.04.20撮影)

原木川、七飯町の本町、藤城や大沼湖畔の上軍川、上磯町茂辺地、木古内町大釜谷で生息が確認されたことは、北海道南西部（道南）のほぼ全域に本種が分布することを示している。

6. おわりに

函館山では生息が確認できなかったこと（白井 1971）、生息が予想されたが成体の確実な発見記録はなかった（棟方 1985）などから、本種がそれ以降に何らかの要因で生息するようになったことを示しているかのようにも思えるが、それよりも、本種は〈雪解け直後に産卵〉するため、白井氏が後に私信で述べているように、「当時3月下旬～4月中旬にかけて調査することは困難であった。」ことと「産卵場所となる〈貯水槽〉や〈厠〉が旧要塞跡地内にあるため、簡単に目につきにくかった。」ため、発見されなかったのではないだろうか。実は、「以前から生息していることは知っていた。」という情報もある。このことは、つまり、函館山山中で本種が〈生息しているのが当たり前で、それが正確な情報として記録されてこなかった〉だけで、以前から生息していたのではないだろうか。

麓では、アズマヒキガエルの記録はあるが、少なくとも1999年以前にはエゾアカガエルの記録はなく、今回観察できたことは、分布を拡大している可能性がある。では以前から生息しているとして、麓まで見られるようになったのはなぜだろうか。個体数が増えたのか、山の中での産卵場所が減少したため、麓の産卵場所を新たに開拓したためだろうか。産卵場所についてかんがえると、現在の産卵場所のほとんどが、「旧要塞……コンクリート製の水たまり」、つまり〈貯水槽〉や〈厠〉であるとすれば、一部には埋まってしまった

ものもあると思われるが、全体としてほぼ残っていると思われる。函館山は以前から水場が少いことから、埋まらずに残ったそのような水たまりにエゾアカガエルの繁殖が依存するようになったことは当然考えられる。要塞施設が朽ち果て、容易に使えるようになったのは1945年以降であり、エゾアカガエルが函館山に点在する旧要塞施設の〈貯水槽〉や〈厠〉を利用しながら個体数を増加させ分布を拡大し始めたとしてもおかしくはないように思える。エゾアカガエルにとっては、人目に付きにくいと、産卵場所として利用しやすかったのだろう。白井（1971、1989、1993）の報告で、結果としてエゾアカガエルが発見できなかったのは、観察時期と、産卵場所が旧要塞跡という局所的で、当時としては容易に観察できない場所であったことに加えて、個体数が少なかったことも要因の一つと思われる。いまのところ、エゾアカガエルの〈個体数が増えている〉という明確な結論を下せないが、個体数の増加にともない、産卵に適する水場を求めて分散するのは当然のように思われる。

今回初確認された〈カエルの池〉では同時にアズマヒキガエルが産卵をしている。さらに、エゾアカガエルの卵塊は確認できなかったが、「八幡宮の池……」つまり函館八幡宮にある〈勾玉の池〉には毎年多くのアズマヒキガエルが産卵のために集まってくる。斉藤（1996）が「本来生息していたエゾアカガエルがアズマヒキガエルに駆逐されることも考えられ、……」と指摘しているとおおり、エゾアカガエルとの共存という点ではどうなのだろう。今後の調査が待たれるところである。

以前から北海道のエゾアカガエルの生息情報が少ないことは、改めて言うまでもないが、そのうち函館山での情報が不確実であったこ

とは、以前から気になっていたことである。しかし、環境省自然環境局生物多様性センター(2001)が『生物多様性調査 動物分布調査報告書(両生類・爬虫類)』をまとめたことで、北海道南西部、特に函館市の分布が不明であることが明確となった。さらに、2001年になってから、エゾアカガエルに関する新たな情報を収集できたことは、幸運であったと言える。これを契機として2002年以降も北海道南西部の本種の情報がさらに蓄積されることで、情報の空白を埋めていきたい。

最後に、本稿をまとめるに際し多くの助言や指導をいただいた北海道東海大学の竹中 踐博士、函館のカエルについて有益な助言をいただいた白井 馨氏、資料の提供を快く快諾してくれた齊藤和範氏、函館市内および近郊の生息情報を提供していただいた尾崎煙雄氏、今 博計氏、田中邦明氏、田中正彦氏、野田隆史氏には紙面をお借りして心からお礼を述べたい。

* 市立函館博物館本館学芸員

** 函館山ふれあいセンター

引用文献

- 出羽 寛・齊藤和範・南 尚貴. 1997. 旭川周辺におけるツチガエル*Rana rugosa*の分布. 3. 19-23. 北海道都市施設事務所・日本データサービス株式会社. 2000. 平成10年度道南圏道立広域公園動植物調査委託 報告書 概要版. 41pp. 札幌.
- 井濶 裕. 2000. 函館要塞の100年—知られざる函館遺産の軌跡—. 函館の産業遺産. 5:2-13. 函館産業遺産研究会.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2001. 生物多様性調査 動物分布調査(両生類・爬虫類) 報告書. 264pp. 自然環境研究センター、東京.
- 前田憲男・松井正文. 1989. 日本カエル図鑑. 206pp. 文一総合出版、東京.
- 棟方明陽. 1985. 函館山の動物たち. 「わたしたちの函館山」(南北海道自然保護協会編)、19-37. 南北海道自然保護協会.
- 白井 馨. 1971. 生物教材としてみた函館付近の両生類. 北海道高等学校教育研究会研究紀要. 8:273-277. 北海道高等学校教育研究会
- 白井 馨. 1989. 北海道に生息するカエル類. 北海道立理科教育センター研究紀要. 1:47-50. 北海道立理科教育センター.
- 白井 馨. 1993. 北海道に生息するカエルとその教材性. 北海道立理科教育センター講演要旨、北海道立理科教育センター.
- 齊藤和範・武市博人・南 尚貴. 1996. 北海道におけるアズマヒキガエル*Bufo japonicus formosus*の新分布地. 旭川市博物館研究報告. 2. 21-23.
- 齊藤和範・有田智彦. 1997a. 北海道のツチガエル*Rana rugosa* (*Ranidae*, *Amphibia*) はnativeか? immigrantか?—札幌地区および羽幌地区を例にして—. 旭川市博物館研究報告. 3. 11-17.
- 齊藤和範・出羽 寛・南 尚貴・有田智彦. 1997b. 北海道のツチガエル*Rana rugosa* (*Ranidae*, *Amphibia*) は在来種か??移入種か??日本動物学会第68回大会予稿集. 32.
- 齊藤和範・富川 徹・横山 透. 1998. 北海道におけるトノサマガエル及びトウキョウダルマガエルの新分布地. 旭川市博物館研究報告. 4. 25-29.
- 齊藤和範. 2001. いかにして北海道にツチガエルが生息するようになったか?—北海道のツチガエルの分布とその移入過程—. 両生類誌. 6:13-17.
- 竹中 踐. 1993. 両生類・爬虫類相とその分布. 「生態学からみた北海道」(東正剛・阿部永・辻井達一編)、198-208. 北海道大学図書刊行会、札幌.
- 竹中 踐. 1997. 北海道に帰化したトノサマガエルの北広島市における分布. 北海道東海大学紀要理工系. 10. 43-49

函館市北方民族資料館 13年の歩み

—現状と今後の課題—

渡辺文子

はじめに

函館市北方民族資料館（以下「資料館」）は平成元年にオープンし、開館13年目となった平成13年9月9日には入館者数30万人を達成した。本稿では、資料館の概要と主催事業などの活動の歩みをまとめ、展示と主催事業における今後の課題について考えてみたい。

設立の経緯

函館の西部地区には歴史的建造物が数多く残り、その風情あるたたずまいは全国から訪れる観光客を魅了している。

港があり、かつて函館の経済・流通の要であった末広町界隈は、金融の中枢でもあった。

『函館市史 都市・住文化編』（1995⁽¹⁾）によると、「1888（明治9）年の三井銀行出張店の末広町への開設」をはじめとして多くの銀行が軒を連ねていた。また初期の銀行建築は「和洋折衷の形式や洋風意匠を取り入れた土蔵造風の建物が多」かったが、それらは「大正10年の大火を契機として鉄筋コンクリート構造に建て替え」られたとある。現在資料館となっている旧日本銀行函館支店の建物は大正15年に建てられたもので、鉄筋コンクリート地上3階・地下1階建てである。旧日本銀行函館支店は昭和63年に末広町から東雲町へ移転して現在にいたっている。

移転に伴って使われなくなった建物を歴史



写真1. 函館市北方民族資料館外観

的建造物として残しながら有効に活用するべく、函館市が購入して文化施設として再利用しようとしたことが資料館開設のきっかけであった。

市立函館博物館（以下「函博」）の歴史は古く、関氏ら⁽²⁾（1990）によると、明治8年開設の東京仮博物場と、同10年開設の札幌仮博物場に続いて、同12年に開設された開拓使による第3の仮博物場である函館仮博物場にその端を発する。国内で最も古い歴史を持つ総合博物館の一つであり、館の歴史とともに蓄積されてきた収蔵資料のすばらしさは質・量ともに他に類を見ない。中でも北方民族資料は、市立函館図書館に収蔵されている石川啄木関係資料とともに多くの愛好者や研究者から公開が待ち望まれていた。しかし展示スペース等の問題から、なかなか資料を公開する機会が得られずにいた。そんな中で、昭和62年に、旧日本銀行函館支店跡を文化施設として再活用しようという「日本銀行函館支店建物利用プロジェクト」が持ち上がった。

平成元年には函館市が用地・建物を購入し、展示設計と建物改修が行われた。外観や内部は銀行として使われていた当時のままに、展示室として使用するための必要最小限の改修だった。同年11月3日に函館市北方民族資料・石川啄木資料館として開館した。平成5年に函館市文学館が開館するのに伴い、函館市北方民族資料館として単独開館した。建物の延べ床面積は3,044.23㎡、展示スペースは展示ホール161.47㎡、展示室1～7が合計452.35㎡である。地下収蔵庫は346.70㎡で、この他に研修室、団体休憩室などがある。

入館者数の推移

開館から平成12年度までの入館者数を見ると、表1に示すように、平成元年は開館が11月だったので例外として、平成4年まで4万

年 度	入館者数（人）
平成1	10,830
2	41,646
3	43,244
4	40,915
5	32,244
6	41,894
7	34,781
8	35,815
9	37,059
10	35,378
11	34,135
12	29,770

表1. 入館者数の推移

人台を保っている。平成5年には函館市文学館と別れたこともあって3万人台まで落ち込んだが、翌平成6年には再び4万人台に回復している。その後は3万5千人前後で推移していたが、平成12年には有珠山噴火で北海道観光が敬遠された影響を受け、開館以来はじめて3万人を割り込んだ。

管理・運営について

函博があるためか、市立（市営）の資料館かあるいは函博の分館と勘違いされることも多いが、資料館の管理・運営は（財）函館市文化・スポーツ振興財団（以下「財団」）に委託されており、市の施設とは一線を画している。そのため、月1回の館内整理日と年末年始以外は一般に公立の博物館園では休館となる月曜日も開館しているし、5～8月は館内整理日もなく無休である。

財団は平成元年2月に設立され、事務局は湯川町の函館市民会館内にある。『（財）函館市文化・スポーツ振興財団規定・規約集⁽³⁾』によると、「函館市における文化・スポーツの普及振興のために必要な事業を行うとともに、函館市の設置する文化・スポーツ施設の管理

運営に関する事業並びにスポーツ施設の設置および維持運営に関わる事業を行」うとして、資料館を含めて13の文化・スポーツ関連施設の管理・運営を函館市から委託されている。

とはいえ資料自体は函博のものなので、資料の貸借や調査、撮影など依頼があった場合は、必ず函博の了承を得た後に、同館の学芸員立会いのもとで行われる。資料貸出や写真撮影の依頼には、函博担当学芸員の立会いのもとで目的にかなった資料を選定する。時には展示方法についてのアドバイスを受けることもある。

収蔵資料—函館にアイヌ民族資料？

函館市にアイヌ民族資料があることは、実は市民にはあまり知られていない。後に紹介する3つのコレクションは、世界的に見ても大変貴重なものであり、アイヌ民族学研究者などの専門家であれば知らない者はいないといわれるほどである。関係機関からの資料調査、写真撮影、特別展のための資料借用などもしばしば依頼される。

ところが、函館市民にとっては「函館にアイヌなどの北方民族資料がある」ということが、あまりぴんとこないようだ。確かに「函館」といえば、開港に伴うモダンなイメージが先にたってしまう。さらに北海道の最南端に位置するために、「北方」というイメージが浮かびにくいのであろうか。また道内のアイヌ民族関係の資料館は、もともとアイヌの集落があった（そして今も多数のアイヌの人々が生活している）地域に設立されていることが多い。しかしこれは函館には当てはまらない。もちろん現在でも函館やその近郊には、アイヌの方が住んでいるだろう。しかし、歴史的にみると、函館を含む道南地域では12世紀頃からすでに和人の移住が始まっており、和人の増加とそれに伴うアイヌ人口の減少の

ため、比較的早くから伝統文化が途絶えてしまっていた。

それなのになぜこの函館に、世界に名だたるアイヌ民族資料が存在するのであろうか？それはひとえに函博の持つ歴史と、函館ゆかりの2人の人物—馬場脩と、児玉作左衛門—の存在による。

3つのコレクション

北方民族資料館では、函館市が所蔵する民族および考古資料約1万3千件を収蔵・管理している。なかでもアイヌ民族資料は6千件を超え、野村氏は「1ヶ所に収蔵されているものとしては最も多い⁽⁴⁾」と述べている。このアイヌ民族資料コレクションは、大きく3つにわけられる。ひとつは開拓使時代からの歴史をもつ函館博物館旧蔵資料、そして在野の研究者であった馬場脩が収集した馬場コレクションと、元北海道大学名誉教授児玉作左衛門が収集した児玉コレクションである。3つのコレクションの内訳は表2のようになり、合計14,614件のうち、国指定以外の馬

	資料点数および内訳（件）		
アイヌ民族資料	6,215	児玉コレクション	4,430
		馬場コレクション (国指定)	750
		旧蔵資料	1,035
アイヌ以外の 北方民族資料 (旧蔵資料)	132	アリュート	23
		ウィルタ	64
		イテリメン	39
		コリヤーク	2
		エヴェン	4
先史・考古資料 (児玉コレクション)	7,157		
国指定以外の 馬場コレクション	1,110		
合計	14,614		

表2. 3つのコレクションの内訳⁽⁵⁾

場コレクションなど一部は函博に収蔵されている。

函館博物館旧蔵資料

明治12年までさかのぼる函博の長い歴史とともに蓄積されてきた北方民族資料の逸品たちである。明治12年から19年にかけて、函館市内の篤志家から寄贈されたり、樺太や千島に赴いた開拓使によって収集されたそれらの資料は、アイヌ民族の生活用具を今に残す数少ない資料として、学術的にも注目されている。これらの資料は、東京国立博物館、北海道大学附属博物館の所蔵資料とともに、日本で最も古い博物館資料である。

馬場コレクション

馬場脩の生涯については、長谷部氏と清水氏^(6,7)が詳しく紹介している。函館生まれの馬場脩は、昭和5年から昭和13年にかけて、北海道をはじめ樺太、千島、本州で精力的に調査・収集を行い、昭和12年に児玉作左衛門が行った千島の発掘調査にも参加していた。収集された民族・考古資料は1,860件にのぼり、このうち特にアイヌ民族資料は、世界的に学術的価値の高いものとして、758件が国の重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」に指定されている。

函館市は昭和46年に「アイヌの生活用具コレクション」（破損により8件が減失され、現在は750件）を一括購入し、翌47年には樺太・千島出土の考古資料1,110件が馬場氏から寄贈された。現在資料館には、それらの馬場コレクションのうち「アイヌの生活用具コレクション」750件を含む約1,000件のアイヌ民族関係資料が収蔵されている。

児玉コレクション

児玉作左衛門は明治28年秋田県に生まれ、5歳のとき家族とともに函館に移り住んだ。⁽⁷⁾もともと脳解剖学を専門としていながら、考

古学や人類学、民族学など幅広い研究分野をもっており、中でもアイヌ民族学研究に生涯をささげた。海外流出などによるアイヌ民族資料の散逸をおそれ、第2次世界大戦の前後40年にわたって私財を投じて収集されたアイヌ関連資料は文献記録資料を含めて7千件を超え、いつのころからか「児玉コレクション」と呼ばれるようになった。

函館市は、昭和55年に児玉コレクションのうちアイヌ民族資料2,784件と考古資料7,157件の寄託を受けたのをはじめとして、これまでに合計11,587件の資料を寄託された。そして平成10年、児玉作左衛門の長女である児玉マリ氏によって、それらは函館市に寄贈された。児玉マリ氏自身もアイヌの服飾文化について長年研究を続けてきており、現在も市立函館博物館特別研究員として月1回函館を訪れ、展示替えについての助言や資料の整理などに携わっている。

常設展示

北方民族資料館には展示ホールと、テーマごとに分かれた7つの常設展示室があり、約350点の資料が展示されている。各展示室のについて概要をまとめてみた。

展示ホール

受付を済ませて館内に入ると、まず展示ホールでコロポックルの像が出迎えてくれる。コロポックルとはアイヌ民族に伝わる伝説で、フキの下にかくれてしまうほど小さな身体をしているといわれている。そしてその像を取り囲むように、函館ゆかりのアイヌ絵師平澤屏山が描いた「アイヌ風俗十二ヶ月屏風」を展示している。名前が示すとおり、季節ごとのアイヌの風俗を描いた6曲1双の屏風絵で、資料館発行の図録『平澤屏山筆 アイヌ風俗

十二月月屏風』⁽⁹⁾で詳しく解説されている。原本は現在国内3箇所に分散して収蔵されており、そのうち左隻（7～12月）が市立函館博物館に収蔵されている。資料館では、見やすさを考慮して約4倍に拡大したものを掛軸風に吊るして展示している。展示ホールに足を踏み入れると同時に目に飛び込んでくる12枚のアイヌ絵は圧巻である。

写真2には写っていないが、ホール左手には幕末の探検家松浦武四郎が描いた「北海道国郡図」の拡大パネルと3人乗り皮舟「バイダルカ」を展示している。明治8年、樺太・千島交換条約締結に際して千島に赴いた開拓使長官黒田清隆ら一行が中部千島新知島で収集したこの「バイダルカ」は、アリュート民族がラッコ猟に使用していたものである。バイダルカは1人乗り、2人乗り、3人乗りの3種があるが、3人乗りはほとんど資料として残っておらず、世界的にみても非常に珍しい。最近ではカヌーやカヤックの愛好者や製作者の方たちが、人づてに「函館にすばらしい舟がある」と聞いて見学に訪れることも多い。

展示室1「装いの美学」

北の風土に根ざした、様々な北方民族の衣服や服飾品を展示している。7つある中で最も広い展示室で、入ってすぐ左手には生業別

に色分けした北方民族の分布図パネルがある。

特に入口正面の平ケースに展示している「山丹服」は逸品である。「蝦夷錦」とも呼ばれ、山丹交易によって北回りに北海道へ渡ってきた、龍の紋様も豪華な絹製の衣服である。このコーナーでは間宮林蔵の『東韃地方紀行』より抜粋した「山丹交易地—満州仮府デレン—」⁽¹²⁾のパネルなどで山丹交易について解説している。資料館には2点の山丹服が収蔵されており、一つは刺繍で五爪の龍、もう一つは織で四爪の龍の紋様が施されている。いずれも函館の豪商杉浦嘉七が明治12年の開拓使函館支庁仮博物場の開館を記念して寄贈したものであるが、痛みが激しかったため、資料館で常設展示するために大掛かりな修復作業がなされた。展示ケースは山丹服を展示するために当時の函博の学芸員たちが考案したものである。ガラス張りのカバーの中に上面がガラス、下面が鏡張りになった引出し式の展示台をおさめる構造になっており、内側のガラス台の上に山丹服を平置きする。下面を鏡張りにしたことで、普通だと見ることができない背側の紋様も同時に見ることができるのである。

このほかアイヌの衣服や耳飾り、首飾り、ウィルタやエヴェン、イテリメンなどの北方諸民族の衣服が展示されている。

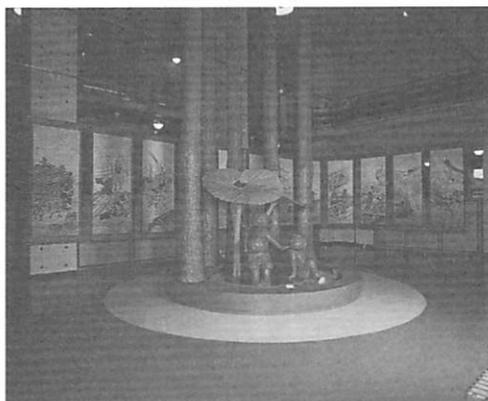


写真2. 展示ホール



写真3. 展示室1

展示室2「北の神々」

シャマンの太鼓やアイヌの漆器類など、儀式、宗教関係の資料を展示している。展示室中央に大きな平ケースがあり、アイヌ民族の捧酒篋（捧酒箸とも呼ばれるが、ここでは資料館の展示キャプションと同じ名称を用いる）を30本余り展示している。アイヌ語でイクパスイ（サハリンではイクニシ）と呼ばれ、儀式の中で神々に酒を捧げたり、祈りの言葉^(13, 14)を神々に伝える非常に重要な役割を持っている。北海道アイヌとサハリン（樺太）アイヌのものに分類して展示しており（写真手前がサハリン、奥が北海道）、地域による意匠の違いがよくわかるようになっている。なぜかサハリンアイヌの方が細工が繊細なものが多いというのが面白い。

正面奥にはアイヌの儀礼用具を展示しており、背景の「フクロウ祭り」（『明治初期アイヌ風俗図巻』（西川北洋筆）より）と、『アイヌ熊送之図』（平澤屏山筆）と資料を対比させることで、それらの資料がどのように使われていたのかわかるようになっている。

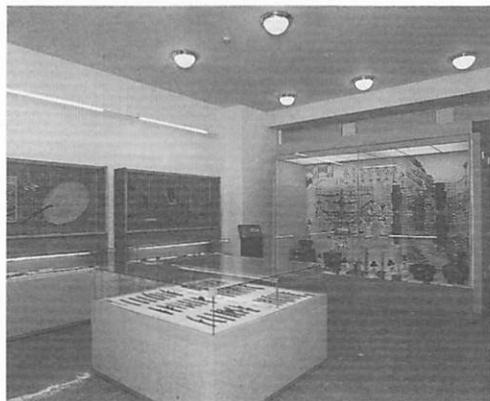


写真4. 展示室2

展示室3「くらしの中の手仕事」

ここでは日常の生活用具を展示している。儀礼用具のような華やかさはないが、北方に生きる人びとの生活の知恵と手仕事のぬくも

りが伝わってくる。

主な展示資料は、アリュートがラッコ猟に用いた銚、ウィルタのトナカイ皮製提鞆、アイヌの狩猟具や喫煙具、盆、団子篋や杓子などの調理用具、五弦琴・三弦琴やムックリなどの楽器、アイヌ語でマキリと呼ばれる小刀などである。持ち手の部分にキケと呼ばれる削り掛けのついたやや大ぶりの包丁が展示されているが、これはアイヌが海の神と見なすカジキを調理するための特別な包丁である。

写真5の手前に写っている土器は児玉コレクションのもので、モヨロ貝塚で発掘されたオホーツク式土器である。展示室の左手には、流水をバックにしたオホーツク文化の解説パネルがある。

通路をはさんで展示室2と3の反対側の壁には、市立函館図書館所蔵の『明治初期アイヌ風俗図巻』の中から抜粋した19の図をパネル展示している。春先には穴グマ狩り、夏にはマス漁など、アイヌの生業が季節ごとによりやすく配置している。



写真5. 展示室3

展示室4「北方民族HAKODATE

COLLECTION」

旧蔵・馬場・児玉の3コレクションの概要についての解説パネルと関連資料を展示している。解説パネルの反対側には情報検索コー

ナーがあり、3台のコンピューターで収蔵資料や北方民族について調べることができる。設置当初はタッチパネル式のものだったが、近年パソコンが普及してきたこともあって、マウス使用型に替わっている。このコーナーはコンピューター慣れした子供たちに大人気で、修学旅行シーズンは人だかりができるほどである。



写真6. 展示室4

展示室5「あそびの世界」

市立函館図書館所蔵の『蝦夷古代風俗』（作者不詳）からアイヌの子供たちの遊びを抜粋し、パネル展示している。3人で片足を互いに組み合わせ、ケンケンをしながら引っ張り合い、足が外れて転んだ者が負けになる



写真7. 展示室5

「アチキリテケレ」や、2組に分かれてヤマブドウの蔓で作った輪を投げあい、一方がそれを棒で突き刺して受ける「ウコカリシユエ」など4点あり、写真中央の斜めの棒と輪は、「ウコカリシユエ」の棒と輪の複製である。

展示室6「アイヌ民族学の先駆者たち」

16世紀中頃から17世紀初頭にかけて、蝦夷地には海外から多くの宣教師や探検家が訪れた。日本においても、蝦夷地開拓や18世紀末頃のロシアの南下政策に伴う北辺防備のために蝦夷地への関心が高まり、多くの探検家達が蝦夷地を訪れ、北辺に関する新たな知識・情報をもたらすようになる（表3）。彼らの残した記録は、当時のアイヌの暮らしや風俗を知るうえで非常に貴重な資料となっている。ここではマールテン・G・フリースの『航海日誌—JAPAN—』（1858年発行）や新井白

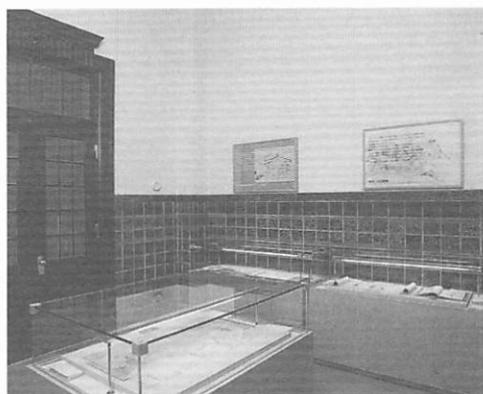


写真8. 展示室6

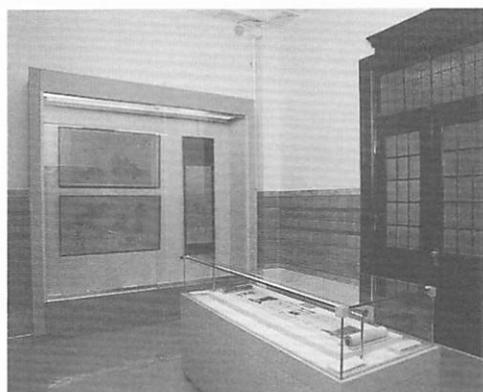


写真9. 展示室7

11月14日(祝日)	● 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月15日(祝日)	○ 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月17日(祝日)	● 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月18日(祝日)	○ 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月19日(祝日)	● 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月20日(祝日)	○ 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月21日(祝日)	● 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月22日(祝日)	○ 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月23日(祝日)	● 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月24日(祝日)	○ 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月25日(祝日)	● 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月26日(祝日)	○ 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月27日(祝日)	● 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月28日(祝日)	○ 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月29日(祝日)	● 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)
11月30日(祝日)	○ 蝦夷地探検の経路の文化遺産(蝦夷地探検の経路の文化遺産)

表3. 北方探検・見聞録略年譜

石の『蝦夷志』(写)などの文献資料を展示している。写真手前のケースには林子平の『蝦夷国全図一三国通覧図説附図』(写)を展示している。これは1785年に単独図として刊行された最初の蝦夷地図で、実際の地形とはかなり異なっている。

展示室7「アイヌ絵の世界」

ここでは和人によって描かれたアイヌ絵を紹介している。アイヌ絵の定義等については、『平澤屏山筆 アイヌ風俗十二ヶ月屏風』⁽⁹⁾に詳述されている。

写真9の右に写っている屏が展示室への入口で、通常は開け放されている。入口から見ると左側の壁には「蝦夷風俗を描いた人々」と題されたパネルがあり、小玉貞良や平澤屏山、秦檜磨、蠣崎波響など代表的なアイヌ絵師の生没年が線で表された一覧になっている。奥のハイケースに3点のアイヌ絵が展示されているが、現在は昭和15年に馬場脩が児玉作左衛門の病氣快復を祝って贈ったアイヌ絵『メノコと熊』など2点が展示されている。写真中央の平ケースには村上島之允作『蝦夷島奇観』を展示している。

展示替え

北方民族資料館では毎年11月に収蔵資料の

燻蒸処理を行っており、これに合わせて、資料の保存と展示資料を一新する目的で展示資料の入れ替えを行っている。アイヌ絵、書籍類、アイヌ衣服、山丹服など、同一資料が複数あるものはできる限り入れ替え、資料の劣化を防ぐようにしている。また衣服などは衣文掛にかけて展示しているとどうしても伸びてしまうため、3ヶ月ごとに展示替えを行っている。その他にも9月から4月まで月1回ある館内整理日に合わせて数回の展示換えを行っている。平成13年には展示室1のアイヌの首飾りを全面的に入れ替えた。ただ、基本的に同一資料を入れ替えているだけなので、一見したところ内容が変わりばえしないという点は否めない。

主催事業

財団では、函館市から委託されている文化・スポーツ施設の管理・運営のほかに、施設ごとに様々な主催事業を行っている。資料館では教育普及活動として各種講座を開催している。

市民に北方文化についての理解を深めてもらうため、資料館では様々な講座を開催してき

た(表4)。

中でも平成3年から行われている「ミュージアム・トーク」は、毎年テーマを変えて、民族学・考古学・歴史学・人類学などの分野で活躍している研究者を招き、最新の研究成果を発表することをコンセプトとしている。表3からもわかるとおり、第1回目は東京国立博物館主任研究官の佐々木利和氏をはじめとして、これまで実に多彩な研究者が講演を行っている。

ミュージアム・トークはどちらかというところ専門性の高い学術的な講演会であるが、毎回テーマが変わることもあってか、毎年欠かさず参加して下さる方も多く、11回目を迎えてすっかり市民の間に定着したように思う。しかし、それだけでは一般市民の心をとらえることは難しい。もっと体験的に、楽しみながら北方諸民族の文化に親しむ講座があってもいいはずである。

『地域史研究はこだて』(1999)の中で野村氏は、「函館においてアイヌ民族やアイヌ文化についてあまりにも知られていない⁽⁴⁾」と述べており、それは「函館においてアイヌ文化に触れられるような場が従来ほとんどなかった」ためであるとしている。近年アイヌ文化の伝承活動が盛んになり、活動への助成も幅広く行われているが、道内に多くのアイヌ文化伝承保存団体があるにもかかわらず、道南では地元拠点を持つ団体が少ないため、なまのアイヌ文化に接する機会が少なくならざるを得ない。また表4からもわかるように、資料館でも平成6年まではアイヌ伝承者による講座は開催されていない。現在アイヌの人々がどのように生きているのか、伝統文化はどのように伝承されあるいは失われたのか、というような現在>(<現実>と言ってもいいかもしれない)と、資料の語りかける<過

去>とをつなぐ糸が、資料館の展示のみでは見えにくいのである。

そこで野村氏は、今を生きるアイヌ民族とコミュニケーションをとることを重視し、アイヌの伝統文化を紹介する様々な講座を企画した。千歳アイヌ文化伝承保存会会長の中本ムツ子さんを招いてアイヌの口承文芸などをわかりやすく紹介する「アイヌの民話」「アイヌ文化を学ぼう」や、アイヌ刺繍伝承者による「初めてのアイヌ刺しゅう」「アイヌ紋様刺しゅう教室」、トンコリ奏者オキらによる演奏会など、平成7年以後主催事業数が増えているのがわかる。平成12年にはさらに「アイヌ紋様木彫り教室」が加わった。ミュージアム・トーク、夏・冬休み自由研究とともに、徐々に市民の間に定着しているという手ごたえを感じる。

最近は修学旅行の自主研修に必ずといっていいほど体験学習が組み込まれる。資料館ではそのようなニーズにこたえるため、平成11年から予約制の「ムックリ製作体験」を開催している。ムックリとは主に竹製のアイヌ民族の伝統楽器で、講座では切り出しナイフと彫刻刀を使ってムックリを製作し、鳴らし方の練習をする。これも年々回数が増え、平成13年度は16回行われた。冬休み自由研究の講師でもある山中浩氏は函館市内で工芸をやっている方で、以前資料館で説明員をしていた時にムックリに興味を持ち、作り方を研究するようになった。年に16回も講座ができるのも、山中氏のような函館在住の講師がいればこそである。

今後に向けて

ここまで、資料館の概要と主催事業などの活動の歩みを述べてきた。今後に向けて、資

料館に残された課題は何だろうか。資料館の活動の大きな柱である常設展示と主催事業について考えてみたい。

常設展示に求められていること

平成5年に現在の常設展示となってから現在まで、展示内容はほとんど変化していない。その間、来館者の反応はどうだったのだろうか。平成5年度と平成12年度のアンケート結果から、来館者の反応の比較してみよう。表5は、アンケートに書かれた意見・要望の中から主だったものを抜粋してまとめたものである。回収率が非常に低く、来館者全体の意見をすいあげているとは言い難いかもしれないが、参考にはなるはずだ。来館者の内訳についてははっきりしたデータが残っていないが、ほとんどが観光客と修学・研修旅行の学生で、市内および近郊在住者はごく一部と考えてよいと思う。

比べてみると、5年、12年ともに同じような意見がいくつかあることがわかる。平成5年の①（以下「5-①」のように記載する）のような「展示資料の説明が不足している」という意見である。5-⑤、⑪、12-④、⑱も同様の意見で、これはいつのアンケートでも必ず挙げられている。5-⑥のような意見も、解説不足による難解さへの不満と取れなくもない。その一方で5-⑨、⑩、12-①、⑫のように「とてもわかり（見）やすかった」という逆の意見があることも確かである。また5-⑫や12-⑨のような中間的意見もある。

展示資料にアイヌ語名をつけて欲しいというのも両年度に共通する意見である（5-⑯、12-⑭）。キャプションには日本語名とそのローマ字表記および英語名が書かれているが、アイヌ語名は書かれていない。常設展示解説資料の作成を望む声も、平成5年にすでに出ていたようである（5-⑰）。

12-②や⑦のような「現在のアイヌの生活やこれまでの歴史を紹介して欲しい」という意見は、平成5年には見られなかったもので、タブー視されがちだった伝統文化を積極的にアピールする方向へと向かう、アイヌ民族を取り巻く状況や人々の意識の変化が感じられる。ちなみに「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」いわゆる「アイヌ新法」は平成9年に施行された。

平成5年から12年まで、来館者からの変わらない反応があるとすれば、「解説不足でわかりにくい」ということであろう。資料はすばらしい。展示もなかなか見やすい。しかし言葉による説明が少なすぎて、どういう資料なのかわからない。もちろん展示室の随所に解説パネルが設置されていることは言うまでもない。展示室3には狩猟具と一緒にその使い方を図で説明したパネルが展示されている。それでもなお、専門知識のない観光客や学生にとっては、資料がすばらしいだけに、個々の資料にもっと詳しい解説をつけて欲しいと思うのだろう。しかしこまごまと解説キャプションのついた展示が見やすくわかりやすいかといえば、これも賛否両論分かれるところである。おそらく展示を設計した時点では、解説文は必要最小限におさえ、資料そのものが見る者に語りかけるものを重視する、ということ为前提としていたのではないだろうか。

資料館としても、そのような来館者の意見を全く無視していたわけではない。現在は多くの資料に簡単な個別解説キャプションがつけられている。また修学・研修旅行生向けに展示を見ながら答えを探すクイズを配布したり、アイヌ紋様についての解説プリントを館内に設置するなど、来館者に展示をよりスムーズに理解してもらおうための工夫がなされてい

る。

来館者の要望に応じて常設展示を改善していくことも大切だが、リピーターを増やすことを考えると、それだけではちょっと物足りない。資料館に何度も足を運んでもらうには、どうしても展示に変化が必要になってくる。資料館や博物館の目玉といえば、やはり特別展である。いつも同じ資料しか見られないとなれば、市民であれ観光客であれリピーターも望めない。約350点の資料が展示されているといっても、1万2千件余りある資料の中の350点である。まだ展示されたことのない隠れた逸品もたくさんあるに違いない。博物館施設である以上、資料を保存していくことを前提として、展示による資料の有効活用を図っていかなければならないが、方法はいくつか考えられる。例えば、普段は研修室として使っているスペースを臨時の展示室にする。またミュージアム・トーク開催時に、そのテーマに合う資料をミニ展示するなど、主催事業の目的やテーマに合わせた展示を行うことも考えられる。写真などでアイヌ文化を紹介するパネル展も面白いかもしれない。このように、常設展示は常設展示として、その他に常に何か新しいものを提供する努力が必要になってくるだろう。

主催事業でできること

主催事業では、修学旅行生向けのムックリ製作体験を実施することなどで入館者増を図ってきた。アンケートの結果から、近年アイヌの文化や歴史を知ることへの需要が高まってきていることがうかがえると述べたが、この点についても、野村氏が企画した様々な体験学習講座などによって、資料館は現在まで伝承されてきたアイヌ文化の一部に触れる機会を提供できるようになった。特にアイヌ文化伝承者を積極的に招くようにしたことは、と

てもプラスになっていると思う。伝統文化を伝承している人に直接会うということは、その人の経験や人生観を知ることであり、アイヌ民族がこれまで歩んできた歴史を、その人に視点から垣間見るということでもある。たとえ講座の間数時間一緒にいるだけでも、これは展示を見るだけでは決して得られない貴重な体験に違いないのだ。これまではもっぱらアイヌ文化の伝承者を招いてきたが、今後はアイヌ以外の北方民族の伝承者を招くことも検討すべきだろう。

資料館や博物館で行われる講座や講演会は、通常展示および資料と相補関係にあり、互いが互いを理解する助けとなっているものである。しかし資料館で開催されてきた講座の中で資料を利用したものは、平成6、7年度の「THE MATERIAL—資料撮影と写真展—」だけである。ミュージアム・トークでは聴講と同時に展示も見てもらうようにしているが、必ずしもテーマが展示資料と直接関係があるとは限らない。これだけたくさんの資料があるのだから、資料と直接的に触れ合える講座はぜひとも実施したいものだ。平成14年度の事業内容はもう決定しているが、15年度以降に向けて、これが新しい課題と言えるだろう。

おわりに

実は「どうして函館にアイヌ民族資料が？」と思っていた張本人は私である。大学生として函館に引っ越してきたよそ者の私にとって、一般にいわれている「異国情緒あふれる函館」のイメージと「アイヌ（北方）民族資料」とが一体どこでつながるのか、なかなか理解できなかった。しかし本稿をまとめる中で、函館にこの資料館が存在する意義について、改めて理解を深めることができたように思う。

最後に、これまで資料館の設立と運営に携

わってこられた全ての方々に深く敬意を表します。

(函館市北方民族資料館学芸員)

註

- (1) 函館市史編さん室、『函館市史 都市・住文化編』、198p—201p (1995)
- (2) 関秀志・中田幹雄・千代肇、明治期における北海道の博物館(1)、北海道開拓記念館調査報告 第29号、北海道開拓記念館、113p—139p (1990)
- (3) 『(財)函館市文化・スポーツ振興財団規定・規則集』、1p
- (4) 野村祐一、地域史研究 はこだて 第30号、函館におけるアイヌ民族資料について思うこと、函館市史編さん室、46p—49p (1999)
- (5) 児玉コレクションは平成10年までの寄贈資料件数、その他の数値は昭和54年発行の『市立函館博物館蔵品目録<1>民族資料篇』による
- (6) 長谷部一弘、馬場コレクション研究—函館博物館所蔵アイヌ民族資料いわゆる「馬場コレクション」について—、市立函館博物館研究紀要 第2号、市立函館博物館、1p—24p (1992)
- (7) 長谷部一弘、北方文化と二つのコレクション—馬場コレクション・児玉コレクションについて—、「馬場・児玉コレクションにみる 北の民アイヌの世界」展図録、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、121p—133p (2000)
- (8) 清水恵、地域史研究 はこだて 第31号、覚書・モイセイ馬場脩の生涯—北方民族研究にささげた生涯—、函館市史編さん室、52p—66p (2000)
- (9) 函館市北方民族資料館、『平澤屏山筆 アイヌ風俗十二ヶ月屏風』、(1998)
- (10) 長谷部一弘、アリュートの皮舟、第9回特別展「北方民族の船 北の海をすすめ」図録、北海道立北方民族博物館、45p—49p (1995)

- (11) ウィリアム・ラフリン、『極北の海洋民 アリュート』、六興出版、68p—70p (1986)
- (12) 間宮林蔵原著、大谷恒彦訳、『東韃紀行』、教育社、122p—144p (1981)
- (13) 馬場脩・姫野英夫、ひげべらについて、国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第2篇 北海道アイヌのひげべら、市立函館博物館、22p—29p (1976)
- (14) 萱野茂、『アイヌの民具』、すずさわ書店、241p—244p (1978)
- (15) 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、『平成12年度 財団の活動』(2001)

参考文献

- 市立函館博物館、『函館博物館100年のあゆみ』、(1979)

年度 (平成)	事業		
	事業名	講師	参加人数
1	市民講座「アイヌの技－服飾に見るアイヌ紋様」	児玉 マリ (市立函館博物館特別研究員)	17
2	開館1周年記念講演会「北のシルクロード－山丹交易その歴史的意義」	佐々木 史郎 (国立民族学博物館研究員)	181
3	ミュージアム・トーク「アイヌ絵の世界」	佐々木 利和 (東京国立博物館主任研究官)	61
4	ミュージアム・トーク「サハリン紀行」	大塚 和義 (国立民族学博物館教授)	63
5	夏休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	長谷部 一弘	37
	ミュージアム・トーク「極北の海洋狩猟民族－アリュート－」	スチュアート・ヘンリ (目白学園女子短大教授)	56
6	夏休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	長谷部 一弘	35
	冬休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	長谷部 一弘	27
	「THE MATERIAL－資料撮影と写真展－」	中村 正明 (富士写真フィルム(株))	20
7	ミュージアム・トーク「謎のオホーツク文化」	菊池 徹夫 (早稲田大学教授)	92
	夏休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	野村 祐一 (資料館学芸員)	31
	冬休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	野村 祐一 (資料館学芸員)	40
	「THE MATERIAL－資料撮影と写真展－」		2,295
	親子体験教室「ムックリを作ろう」	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	24
	ミュージアム・トーク「北方民族の言葉の世界」	中川 裕 (千葉大学文学部教授)	45
8	「アイヌの民話」	中本 ムツ子 (千歳アイヌ文化伝承保存会会長)	88
	「北方民族の切り紙細工をしよう」	野村 祐一 (資料館学芸員)	27
	冬休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	野村 祐一 (資料館学芸員)	17
	親子体験教室「ムックリを作ろう」(2回)	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	34
	ミュージアム・トーク「シャマニズムの音の世界－北方民族の芸能」	谷本 和之 (北海道アイヌ民族文化研究センター所長)	51
9	「アイヌの民話」	中本 ムツ子 (千歳アイヌ文化伝承保存会会長)	71
	夏休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	野村 祐一 (資料館学芸員)	37
	アイヌ文化をたずねて「白老・平取・静内ツアー」	主催 日本旅行	22
	「北方民族紋様凧づくりをしよう」	秋山 修世 (はこだて日本の凧の会事務局長)	14
	ミュージアム・トーク「極北の民イヌイトの歴史と現状」	岸上 伸啓 (国立民族学博物館助教授)	73
	「ムックリを作ろう」(2回)	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	44
	「ムックリをならそう」	村木 美幸 ((財)アイヌ民族博物館)	23
10	「アイヌ文化を学ぼう」	中本 ムツ子 (千歳アイヌ文化伝承保存会会長)	64
	夏休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	野村 祐一 (資料館学芸員)	30
	アイヌ文化をたずねて「札幌ツアー」	主催 日本旅行	中止
	「初めてのアイヌ刺しゅう」	津田 命子 ((社)北海道ウタリ協会学芸員)	18
	ミュージアム・コンサート「オキ トンコリ演奏会」	加納 沖 (トンコリ奏者)	53
	ミュージアム・トーク「縄文にさぐるアイヌ文化の息吹」	大島 直之 (伊達市教育委員会文化財課長)	67
	「北方民族紋様凧づくりをしよう」	秋山 修世 (はこだて日本の凧の会事務局長)	31
	「ムックリを作ろう」	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	29

表4. 函館市北方民族資料館関係主催事業一覧

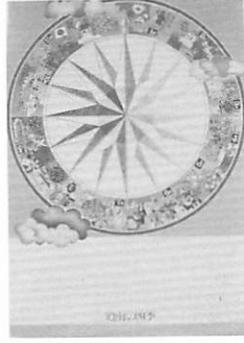
年度 (平成)	事業名		講師	参加人数
	事業	名		
11		「アイヌ文化を学ぼう」	中本 ムツ子 (千歳アイヌ文化 伝承保存会会長)	57
		夏休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	渡辺 文子 (資料館学芸員)	31
		「アイヌ紋様刺しゅう教室」	加藤 町子 (アイヌ刺しゅう 家)	16
		「萱野 茂 講演会－アイヌの民具とともに歩んだ 40年－」	萱野 茂 (萱野茂・二風谷アイヌ 資料館館長)	168
		北方民族資料館 コンサート「OKI with MAREWREW featuring UMEKO ANDO」	オキ、安東ウメ子、鈴木キヨ シ、他	103
		ミュージアム・トーク「蝦夷錦と近世の北方交易」	中村 和之 (北海道釧路湖陵 高校教諭)	74
		冬休み自由研究「北方民族紋様凧づくり教室」	秋山 修世 (はこだて日本の凧 の会事務局長)	27
		冬休み自由研究「ムックリをつくろう」	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	17
	修学旅行体験学習「ムックリをつくろう」	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	241	
12		「アイヌ文化を学ぼう」	中本 ムツ子 (千歳アイヌ文化 伝承保存会会長)	58
		夏休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	渡辺 文子 (資料館学芸員)	28
		「アイヌ紋様刺しゅう教室」	上武 やす子 (アイヌ刺しゅう 研究家)	14
		「アイヌ紋様木彫り教室」	高野 繁廣 (アイヌ伝統工芸 家)	21
		ミュージアム・トーク「函館のアイヌコレクション」	児玉 マリ (市立函館博物館 特別研究員)	74
		冬休み自由研究「北方民族紋様凧づくり教室」	秋山 修世 (はこだて日本の凧 の会事務局長)	28
		冬休み自由研究「ムックリをつくろう」	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	32
		修学旅行体験学習「ムックリ製作体験」(年間18回 開催)	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	362
13		「アイヌ文化を学ぼう」	中本 ムツ子 (千歳アイヌ文化 伝承保存会会長)	52
		夏休み自由研究「北方民族の切り紙細工をしよう」	渡辺 文子 (資料館学芸員)	27
		「アイヌ紋様刺しゅう教室」	上武 やす子 (アイヌ刺しゅう 研究家)	14
		「アイヌ紋様木彫り教室」	高野 繁廣 (アイヌ伝統工芸 家)	17
		ミュージアム・トーク「古代文化にみる北方諸民 族の交流」	菊池 俊彦 (北海道大学文学 部教授)	100
		冬休み自由研究「北方民族紋様凧づくり教室」	秋山 修世 (はこだて日本の凧 の会事務局長)	23
		冬休み自由研究「ムックリをつくろう」	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	23
		修学旅行体験学習「ムックリ製作体験」(年間16回 開催)	山中 浩 (工房YAMANAKA主宰)	326
	修学旅行体験学習「ムックリ演奏体験」	資料館職員		

意見・要望	
平成5年度 実施期間 5月1日 ～ 10月31日 回収率 8.25%	<ul style="list-style-type: none"> ① 展示資料は興味深いものが多いのだが、個々にもっと詳しい解説をつけておけばよいのと思う ② 数年前に来館したときより資料が増え、内容が充実して大変わかりやすくなった ③ ユーカラを館内に流してはどうでしょうか ④ 貴重な資料の1つ1つが沢山のことを伝えてくれることに改めて驚かされました ⑤ 個々の展示物に対しての説明が少なく、わかりづらい ⑥ もうちょっと子供にもわかるようにしてください ⑦ 資料点数が少ないように思いますが、どうでしょう ⑧ BGMにアイヌの音楽や歌を流してみてもどうでしょう ⑨ 資料の展示の仕方(企画?)とても良かった。特に解説文は、見るものに心温まる何かを与えてくれたようです ⑩ 展示の方法や説明がわかりやすいです。簡単で良いです ⑪ 広さの割に内容が不満。詳しい解説をつけて欲しい ⑫ 詳しい説明書きがあるととってもわかりやすくなると思います。展示はとても見やすかったです ⑬ 展示資料をまとめた本が欲しい ⑭ 2年前にも1度訪れているのですが、一層展示内容が充実して見ごたえのあるものになったと思いました ⑮ 貴重な資料ですが、大切に並べてあるだけでは民族の実像を実感できません ⑯ 展示品にアイヌ語名を ⑰ 展示品の説明付きのようなパンフレット(有料でも)を作って欲しい ⑱ 見るだけではつまらない。実際にさわったり、身につけてみたりできるともっと楽しくなると思う
平成12年度 実施期間 4月1日 ～ 3月31日 回収率 3.05%	<ul style="list-style-type: none"> ① 見やすく丁寧に展示されているという印象を受けました ② アイヌの現在にいたるまでの歴史の紹介があってもいい ③ 2度目ですが、説明員の方のお話をきいて、とてもわかり、1回目とは比較にならないくらい興味深く理解できました ④ もう少し説明書きが細かくあればと思いました ⑤ 今後展示物が増えることを期待します。その時はまた来ます ⑥ ホームページはないのですか? ⑦ アイヌの方の現在の生活を知りたい ⑧ 手で触れられるもの、レプリカがあればなお結構 ⑨ 展示品については充実しているが、解説が不足 ⑩ 単に資料を展示しておくだけの場所であっては欲しくない。もっと北方民族のことを人々に伝える施設として運営に努力して欲しい ⑪ 衣類や生活については良くわかったが、歴史の部分が説明不足 ⑫ 全体的にゆったりと余裕のある展示の仕方は大変見やすかった ⑬ もっと展示を増やして欲しい。スペース的に無理なのか? ⑭ 展示品の名前を一中略一なぜアイヌ語で書かないのか ⑮ 学習資料も置いて欲しい(中高生が来館してもわかりやすく、また資料入手のためにも) ⑯ もう少し写真を置いたりして、一般人も楽しめる資料館に ⑰ 捧酒筥等、民具をどのように使っていたのか、詳しい説明が欲しい ⑱ 写真等あればアイヌの人が存在していたという実感がもっとわくと思う ⑲ 様々な展示物から当時の様子(生活・文化)を感じることができ大変勉強になりました ⑳ 小さい子供には難しい。ゲームとか体験など取り入れて、どんな世代でも理解できる内容であればと思います

表5. 平成5、12年度アンケートより意見・要望の抜粋



観光ポスター 当別
羽野栄一 1976
第2回函館デザイナーグループ
会員展出品



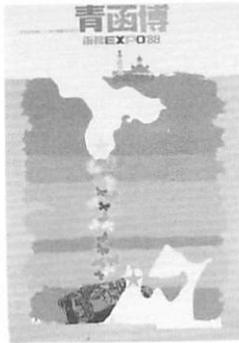
道南の四季
羽野栄一 1976 頃
第2回函館デザイナーグループ
会員展出品



観光ポスター はこだて
羽野栄一 1977



抒情の街 函館の…連続船を守れ!
羽野栄一 1980



青函博 函館 EXPO' 88
羽野栄一 1988



観光ポスター 江差
羽野栄一

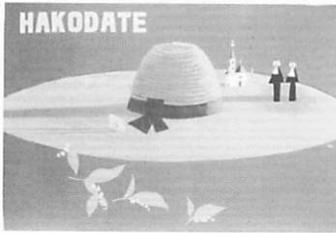


蝶々
羽野栄一



日本の芸能シリーズ 能・狂言
青木時雄

- ・ 作品名、作者、制作年、主な出品歴の順で記した。
- ・ 作品名が正確に分からないものは、作品に明記された文字を作品名とした。
- ・ 制作年は、作品に明記されたものを記し、出品歴が分かるものは出品年頃とした。
- ・ 作者が羽野栄一のもの、羽野栄一氏所蔵・写真提供、作者が青木時雄のものは青木アイ子氏所蔵・写真提供である。
- ・ 『羽野栄一のデザイン』、羽野栄一アルバム、青木時雄アルバムを参考とした。



観光ポスター HAKODATE
羽野栄一 1957
1957年日宣美展出品



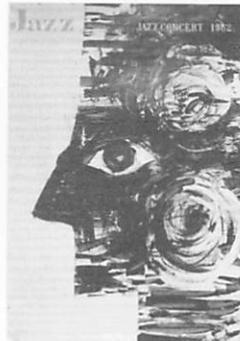
観光ポスター Hakodate
羽野栄一 1958
1958年日宣美展出品



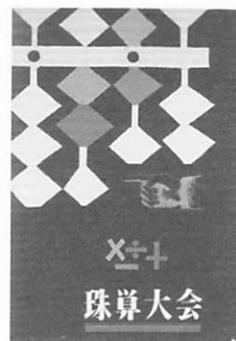
紋展
羽野栄一 1959
1959年日宣美展出品



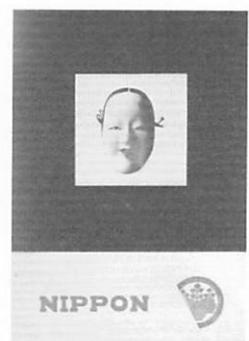
グリム童話集
羽野栄一 1962頃
第1回羽野栄一個展出品



Jazz
羽野栄一 1962頃
第1回羽野栄一個展出品



珠算大会
羽野栄一 1962頃
第1回羽野栄一個展出品



NIPPON
羽野栄一 1962頃
第1回羽野栄一個展出品



北海道の古都シリーズ '松前'
羽野栄一 1965
1965年日宣美展出品



インド宝石展
羽野栄一 1968
1968年日宣美展出品



3A ILLUSTRATION
羽野栄一 1973頃
第2回羽野栄一個展出品



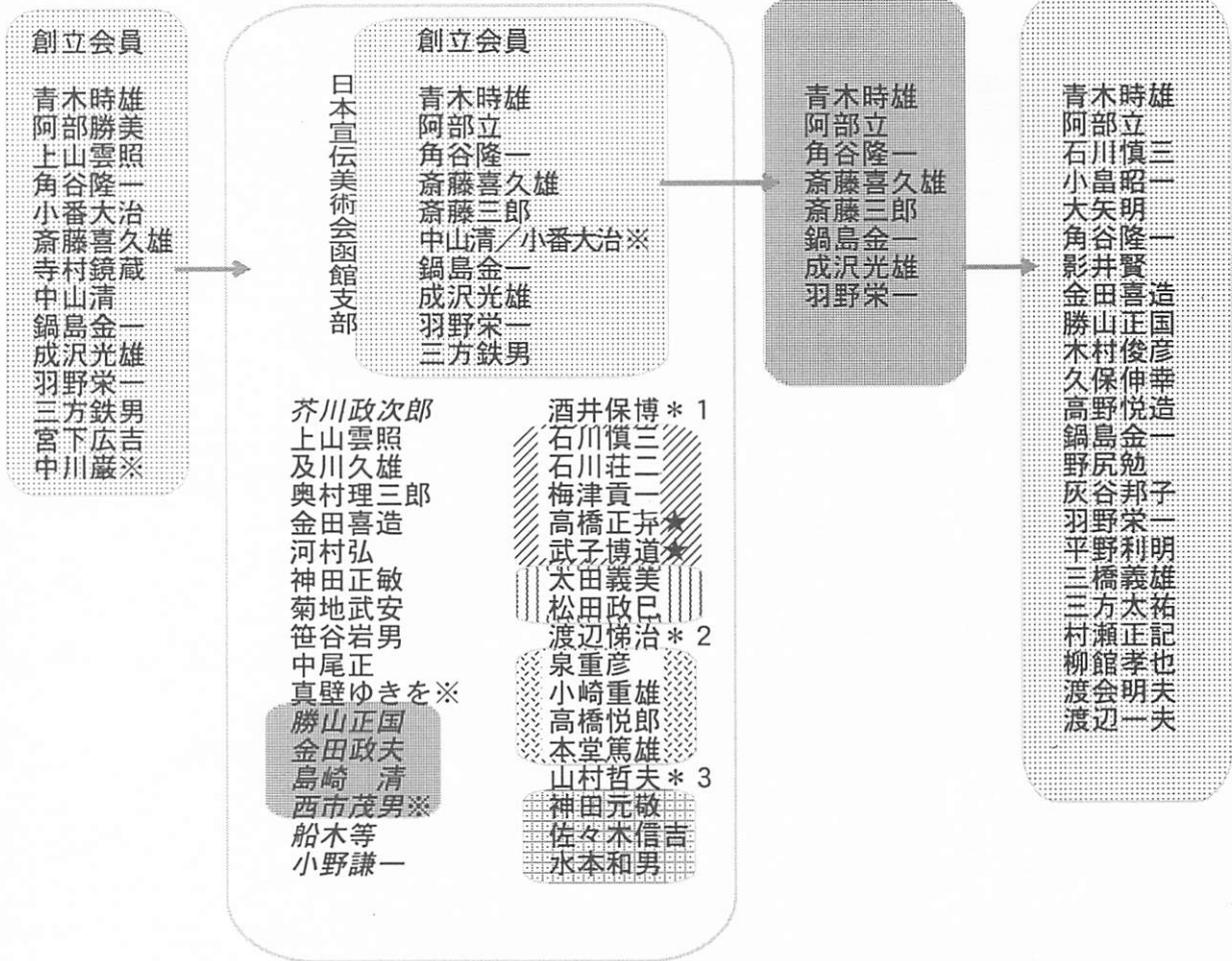
写楽展
羽野栄一 1973頃
第2回羽野栄一個展出品

付録 ポスター原画調査一覧

北方宣伝美術家集団
昭和22年10月15日結成

函館宣伝美術会
昭和28年7月25日結成

日本宣伝美術会函館連絡所 函館デザイナー・グループ
昭和32年1月函宣美より退会 昭和45年7月1日結成



- 「函館デザイン協会年表」『ビジュアルの荒地』より
- 「昭和28年函宣美会員名簿」 斜体は手書き
- 同年10月16日付 函宣美「通達」より新会員
- * 1 「昭和29年函宣美会員名簿」
- 同年5月1日付 函宣美「委員会決議報告」より新会員
- 同年10月17日 函宣美「会報」第8号より新会員 ★は脱会
- * 2 同年11月 「第3回商業デザイン展」目録
- 同年12月20日付 函宣美「会報」より新会員
- * 3 昭和30年8月14日付 函宣美「会報」より新会員
- 同年11月 函宣美「秋季商業美術展」目録
- 昭和32年1月付 函宣美「退会声明書」

※中川蔵は羽野の記述に従い付加した。
 ※昭和30年版『函館道南人名録』『日本宣伝美術会函館支部』では、中山清ではなく、小番大治を含む10名である。
 ※西市茂男は昭和29年2月「第2回北洋博商業美術展」以降、名前が見当たらない。
 ※真壁ゆきをは昭和30年1月付「函宣美会員名簿」以降、名前が見当たらない。

付録 北方宣伝美術会から函館デザイナー・グループまでの会員一覧

した。ただ、函館では、中央に向かうだけではなく、羽野が中心となって、郷土のデザイン活動のあるべき姿をみつめ、後進の育成に力を入れて、函館のデザイン界を作り上げようとする姿勢がみえてきた。そして、羽野がこの姿勢を貫いていくうえで、共に活動する仲間であり競争相手である会員たちの存在と、札幌で活躍しながら常に函館の活動を支援する栗谷川の存在も大きいことが感じられた。

今後は、羽野をはじめとする個々の作家に焦点を当て、聞き取りと作品の所在調査などを行い、函館におけるデザイン活動について再検討していきたい。また、日宣美函館会員が脱会した後の函宣美やそれ以後のデザイナーグループ、デザイン協会と会員たちの活動については、今後の課題としたい。

青木アイ子氏、角谷隆一氏、羽野栄氏には、資料提供および聞き取り調査にご協力いただきました。また、栗谷川悠氏、亀谷隆氏には貴重な情報を提供していただきました。文献収集には、函館市市史編さん室、市立函館図書館にご協力いただきました。末筆ながら、ここに記してお礼申し上げます。

(市立函館博物館学芸員)

註

- (1) 拙稿「研究ノート 北海道商業美術家協会の活動について」平成八年『市立函館博物館研究紀要』第六号
- (2) 『栗谷川健一展』平成六年 芸術の森美術館
- (3) 伊藤隆一「北海道の詩情をデザインする小さな『巨人』—栗谷川健一の人と軌跡—」『受賞に輝く人々(平成三年)』再録 平成四年 北海道
- (4) 拙稿 表紙解説『地域史研究はこたて』第二五号 平成九年

年 函館市

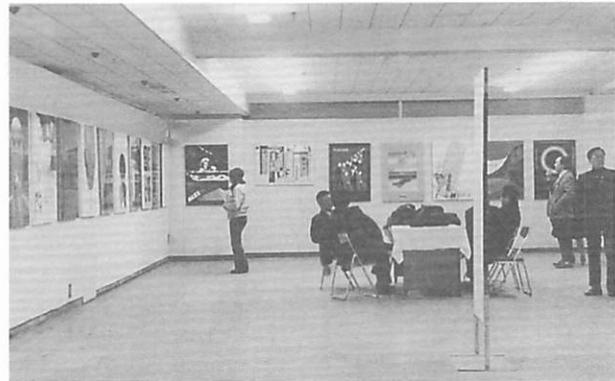
- (5) 「北海道新聞」昭和三十七年七月九日付
- (6) 栗谷川健一「私的北海道デザイン小史」昭和四五年『日本デザイン小史』ダヴィッド社
- (7) 匠秀夫『物語 昭和洋画壇史II』平成元年 形文社
- (8) 今田敬一『北海道美術史』昭和四五年 北海道立美術館友の会
- (9) 山名文夫「概説・日本の広告美術」『日本の広告美術—明治・大正・昭和1—ポスター』昭和四三年 美術出版社
- (10) 「北海道新聞」昭和二〇年一〇月六日付
- (11) 『ビジュアルの荒地から』昭和六二年 函館デザイン協会
- (12) 「函館新聞」昭和二二年一〇月一六日付、一〇月二一日付
- (13) 「函館新聞」昭和二三年一月一〇日付
- (14) 「函館新聞」昭和二四年三月三〇日付
- (15) 板橋義夫「日宣美創立前後」昭和四五年『日本デザイン小史』ダヴィッド社
- (16) 『日宣美の時代』平成一二年 トランスアート
- (17) 一九五七年版『北海道年鑑』昭和三一年 北海道新聞社
- (18) 一九六三年版『北海道年鑑』昭和三七年 北海道新聞社

主要参考文献

- 『日本デザイン小史』昭和四五年 ダヴィッド社
『日本の広告美術—明治・大正・昭和1—ポスター』昭和四三年 美術出版社



昭和49年、第1回函館デザイナーグループ会員展
11月1日～5日、和光において開催。
〈青木アイ子氏蔵〉



昭和51年、第2回函館デザイナーグループ会員展
3月11日～18日、⊕今井において開催。
〈青木アイ子氏蔵〉



昭和52年、第3回函館デザイナーグループ会員展
4月14日～19日、⊕今井において開催。
〈青木アイ子氏蔵〉

正記、柳館孝也、渡会明夫、渡辺一夫であった。

デザイナーグループは、昭和四九年四月に規約を改め、これまでの委員合議制から、初めて会長、事務局制を施し、会長に羽野、副会長に青木、幹事に金田、高野、中村、事務局長に角谷、副事務局長に野尻が就く。一月に第一回会員展を和光で開催する。昭和五一年三月に第二回会員展、翌年に第三回会員展を⊕今井で開催しているが、五四年には約半数が退会し、四月に「函館デザイン協会」と改称し、会長は羽野、事務局長に石川、角谷、影井、小島、木村、中村、平野、大矢、村瀬の会員で再発足する。

昭和六二年、デザイン協会は、北方宣美から数えて創立四〇周年を迎え、記念事業を行う。このころには会員も二倍に増えてきていた。しかし、平成二年に羽野が死去し、核を失っ

たデザイナー協会は、数年後に活動を停止している。

六、終わりに

函館のデザインに関わる活動について、戦後を中心として一通りたどってみた。戦前の活動については、まだ資料や作品が不足しており、引き続き調査を行いたい。

戦後の函館では、比較的早い段階で北方宣美の結成により活動が始まるが、日宣美が結成され、全国的な組織となつて次第に権威していくと、デザイン界が日宣美という権威のもとに、一極集中していった時代であるように感じられた。地方は日宣美に向かい、日宣美は中央と地方との格差をなくすために普及活動を行った。函館の日宣美会員たち、それに続く若手デザイナーたちも登竜門として、日宣美全国展を目指



昭和35年、第9回函宣美展
8月24日～28日、[Ⓜ]今井において開催。
〈市立函館図書館蔵〉

募となつているようだ。函宣美は創立会員が抜け、若手会員と中高生の作品発表の場という全体的に若返った印象を受ける。

また、昭和三七年五月には、「商業デザイン五人展」が二日から三十一日まで森屋で開催されている。五月二三日付の「北海道新聞」には、「函館宣伝美術協会に属している新進グラフィックデザイナー（中略）松田政己、中村博和、渡辺梯治、勝山正国、高野悦造の五氏。いずれも市内の印刷会社などに働きながら商業美術を研究している人たち」と紹介されている。

年に一回の割合で、会員展および公募展を開催していることが分かる。デザインを志す者には、新人の登竜門として日宣美全国展があり、また日宣美北海道地区公募展など応募の場が増えてきたことがあり、函宣美のポスター公募展は学生中心の応募となる。この年、日宣美展は中止となり、緊急総会が開かれた。この年、日宣美展は中止となり、緊急総会を開催し、日宣美の現状と問題点について論議が重ねられ、「日宣美解散」が発表された。⁽¹⁶⁾

五、日宣美解散と函館デザイナーグループの結成

日宣美は昭和四〇年ころから「沈滞」が叫ばれ、日宣美のあり方について、さまざまな批判がなされてきた。次第に学生運動が盛んになり、美術系大学、専門学校も「全共闘運動」に加わった。昭和四四年、叛デザイナー同盟の集会から、日宣美粉碎共闘が結成され、日宣美展の公募審査初日に乱入し、「デザインのアンシャンレージュムである日宣美」の姿を露呈し粉碎すると主張した。これに端を発して、公募展の審査は中止となり、緊急総会が開かれた。この年、日宣美展は中止となり、緊急総会を開催し、日宣美の現状と問題点について論議が重ねられ、「日宣美解散」が発表された。⁽¹⁶⁾

函館の日宣美会員は、協会年表などによれば、これを受けて、直ちに再組織、昭和四五年七月一日に、「函館デザイナーグループ」を結成する。これを機に新人の入会を求め補強が計られた。前述のように、羽野は、デザイナーの地位と資質の向上のためには集団となる必要があると主張している。また、デザイン研究所の卒業生や、活動が尻すぼみになったであろう日宣美の会員たちと、活動の場を必要とするメンバーが揃っていたと思われる。会員は、青木時雄、阿部立、石川慎三、小島昭一、大矢明、角谷隆一、影井賢、金田喜造、勝山正国、木村俊彦、久保伸幸、高野悦造、鍋島金一、野尻勉、灰谷邦子、羽野栄一、平野利明、三橋義雄、三方太祐、村瀬

たしてきた。『函館デザイン研究所機関紙1』には、羽野が「私の感慨」と題して、「函館のデザイン人口の稀薄さ、層のうすさ、そして無気力さを苦にしていた」とし、デザインを理解した人々を社会に送り出し、そこから新たなデザイン活動が生まれ、郷土によるデザインの開花に期待すると述べている。ここでも、角谷は事務局長として就任しており、栗谷川は前掲の機関紙で、「彼（羽野）の親友である角谷君との名コンビが、ここまでもって来たのだ」と、羽野を支える角谷の存在が大きいことを記している。また、講師の阿部は、羽野とはⓂ今井の先輩後輩であり、羽野は阿部に対して、後継者のような存在として特別な期待を寄せていたのではないかと考えられる。

羽野と阿部は、日宣美展の出品からも、実力が評価されている二人だということがわかる。デザイン誌『アイデア』の日宣美展特集号にみられる会員出品者一覧と作品から、昭和三年の第一三回から昭和四年の第一八回までの函館勢の出品者と作品を挙げてみる。

第一三回 成沢光雄「函館労音楽会」
第一四回 該当なし

第一五回 阿部 立「トシコ・マリヤノ・カルテット」

成沢光雄「YOSHINO HARA ピアノリサイタル」

第一六回 羽野栄一「北海道の古都シリーズ、松前」

第一七回 阿部 立「ガーシュウインの夜」

阿部 立「演奏会ヘストラウインスキーの夜」
「秋の北海道」

成沢光雄「北海道」

第一八回 阿部 立「モダン・バレエ公演」

羽野栄一「インド宝石展」

このように、会員の作品であれ選考される日宣美展で、函館から出品しているのは、阿部、成沢、羽野の三名であった。成沢に関しては、昭和四〇年の第一五回展から、北海道新聞社編集局図案課勤務となり、札幌からの出品となっている。

羽野が研究所を創立した年に、日宣美は全国を一つとした組織改革を行い、形の上では地方へのデザインの啓蒙は完了している。この研究所には、東京や札幌の動きを見据えながら、函館にこだわる羽野の姿勢がうかがえる。栗谷川と羽野には、地方に踏みとどまって、個人としてだけでなく、集団をまとめ、後進を育成し、デザイン人口を広げ、社会に対する一つの動きを作っていく姿勢が共通してみられる。

日宣美函館は昭和四〇年には、函館市文化団体協議会に加入し、函館市文化祭にも参加し、四三年のアートハプニングショーに出演したり、翌年には会員合作で「写楽」を出品するといった活動も行っている。

一方、函宣美の活動については、羽野は後に、「（函宣美は）当時はアマチュアの方がたくさんいました。総勢30何名という大所帯です。函宣美はその後主な会員が「日宣美」に入会する人が増えて尻すぼみになってしまいました」と語っている。現在分かっている範囲では、第九回函宣美展が、昭和五年八月二四日から二八日まで、Ⓜ今井で開催されている。八月二五日付の「北海道新聞」には、「会場にはデパート、印刷、広告関係の仕事にたずさわっている市内の商業デザイナー二十五人のポスターやレコードジャケットなど約五十点が出品されているが、ローカルカラーの濃い作品が多く親しみやす。いまた全市中学、高校ポスター公募展に応募した生徒たちの作品四十点も並べられている」とある。ここから、この段階では会員数はさほど減少することはなく、ほぼ

栄一氏の会員、石川慎三など公募四氏」が入選している。公募展全体としての印象は、二月二五日付の「北海道新聞」には竹岡の記名で、「搬入五百十九点という予想を上回る数字はこの試みの成功を物語っているが、陳列されている入選、受賞作をみると、数だけではなく質のうえでも思ったより高いものがあってうれしかった。(中略)八十点あまりの一般の作品と二十点ばかりの会員の作品と、区別なく一機に並べられながら、全体の水準にさほどの高低がない。展覧会としても密度の細かい、まとまったものである」とまざまざ好評である。次に「もう一つ訴えてくる力に欠ける」こと、「思い切って新人の発表の場を多く与えたところに意義のあることなどの展覧会だけに、新人たちもそれにこたえて、単なる達者な技術以上の、新鮮な考え方を大胆に示してほしかった」と次回への期待を込めて、問題点を示している。北海道地区公募展は昭和三八年に第二回展、四〇年に第三回展を開催している。

また函館では、昭和三七年五月一九日、日宣美東京会員の勝井三雄、杉浦康平を講師には招き、「デザイン講座」を商工会議所において開催している。

このように、日宣美全国展や北海道地区展が行われ、デザイナーという職業が確立してきたかに受け取れる。しかし、実体はそうではなかった。昭和三五年四月三日付の「北海道新聞」に、「新商売登場」と題して、「商業デザイナー」羽野栄一が紹介されているが、ここには「中央の一流どころになると月収五十万円、アトリエを建て自家用車を乗り回している人もいるというが、函館の場合は宣伝に大金をつぎ込むほどの業者が少ない」と実情を訴えている。函館などの地方においては、やっと商業デザイナーが独立して看板をあげた

ものの、「商業デザインへの認識はまだまだ低いのである。

昭和三七年には、これまでの作品をまとめた第一回個展が、三月二七日から四月一日まで、**E**森屋で開催された。このころ函館では、羽野栄一がデザイン界の中心的存在であり、第一人者となっていた。羽野は昭和三〇年に函館**㊦**今井企画画伝部を退社し、フリーで活動していた。図録『羽野栄一のデザイン』が制作され、栗谷川から「はこだての羽野さんをたたえる」という文章が寄せられている。このなかでは、「デザインの世界でも恵まれているとは、はこだて」は云えない(中略)経済的な面から見ればとうに逃げ出して普通である。しかし羽野さんは函館にいる」と、二五年來のつきあいの羽野の活躍に対する祝福と敬意を表している。また、日宣美中央事務局長の板橋義夫も文章を寄せ、「函館市ではデザインに関する個展は初のことであり(中略)規模の如何にかかわらずその意味するところ多大である」としている。函館で初めて商業デザインの個展である。個展に際して、文章を寄せた栗谷川はこの年四月、北海道デザイン研究所を札幌に開所する。講師は日宣美会員を中心とした一六人で、デザイナーの養成と、デザイン感覚を持った社会人養成を目的とする研究所は北海道初のもので、話題となった。¹⁾

羽野もまた、昭和四一年には「函館デザイン研究所」を創立する。顧問に、板橋義夫、栗谷川健一、所長に羽野、事務局長に角谷、講師には日宣美会員であり、**㊦**今井後輩の阿部立、函宣美会員の泉重彦ほか、岩船修三や木村良といった画家、写真の面で渋谷四郎などの名がみられる。羽野は、北方宣美の結成から、常にデザイナーの地位と資質の向上を高めること、また自らが知識と技術に磨きをかけるだけでなく、集団として働きかける必要があると訴え、そのまとめ役を果

るに十分な美しい作品が多く、絵画展とは違った花やかなふんい気で人気を集めている。なお同会では十九日午後一時半から函館商工会議所で札幌から栗谷川健一氏を講師に招き『宣伝美術一日学校』を開く」とある。目録をみると、函館会員では、阿部、鍋島、羽野が出品している。

この年、札幌では北海道博覧会が開催された。一九五九年版および一九六〇年版『北海道年鑑』によれば、札幌では前年から「各会場のデザイン、宣伝には本道のデザイナーたちが大量に参加して強力な推進体となり、博覧会に向けて活動が活発化していった。その中心となっていたのが日宣美北海道であった。また日宣美北海道ではこの年四月全国初の試みとして、「日宣美北海道友の会」の設立を斡旋し、新人の育成に乗出している。翌年二月には、日宣美による「第一回商業デザイン講座」が札幌商工会議所で開催され、中央委員の山城隆一、河野鷹思、伊藤憲司、勝見勝、栗谷川健一らが講師にあたった。一月には、三十四年度北海道新聞文化賞（社会文化賞）が札幌在住の宣伝美術家栗谷川健一に贈られた。これはデザイン界への世の認識が高まってきたことも意味している。函館だけではなく、北海道のデザイン界全体に活気があふれているように感じられる。

昭和三四年もまた、札幌、函館二会場で日宣美全国展が開催された。函館は一月一〇日から一五日まで、⊕今井を会場に開催された。一月一〇日付「北海道新聞」では、「ざん新デザインと美しさの調和したポスター、レコードジャケット、パッケージなどの優秀作が多く、内容的にも充実ぶりを示している。とくに五九年度日宣美会員賞を獲得した田中一光さんのポスターをはじめ、地元の会員たちの力作も並び、人々の目を楽しませている」と伝えている。



昭和36年、日宣美北海道公募展
4月14日～19日、彩華において開催。
〈市立函館図書館蔵〉

昭和三五年二月、「第二回商業デザイン講座」は板橋義夫、大橋正、亀倉雄策、原弘、栗谷川健一、上野莊夫、剣持勇の七人を講師を迎えて、札幌で開催された。一九六一年版『北海道年鑑』によれば、「講義と討論を行い大きな収穫があった。この催しは本道の宣伝美術界においては重要な役割を受け持っている」という。この年は世界デザイン会議が行われ、日宣美は創立一〇周年を迎え、一つの区切りの年となった。デザインに対する研究が盛んになり、再検討が行われる段階となった。日宣美もまた問われる立場へと移行する。

この年から、日宣美全国展は北海道では札幌一会場に戻り、以降昭和四三年まで毎年開催される。

翌三六年は日宣美北海道は創立一〇周年にあたり、これを記念して、新たに「北海道地区日宣美公募展」を試みている。

二月二日から二六日まで、札幌⊕今井で開催され、その後四月には函館に巡回している。「函館デザイン協会年表」には、「函館会員並びに、函館勢が応募他数上位入選する」とあり、四月一五日付「北海道新聞」によれば「函館の鍋島金一、成沢光雄、阿部立、羽野



昭和31年、日宣美展か
2月1日～4日、札幌[㊦]今井において開催。
前列左から、角谷隆一、青木時雄、阿部立。
後列左から、羽野栄一、成沢光雄。
〈青木アイ子氏蔵〉

るに至り、二つの相似た団体に所属する所の我々は事毎に不自由と負担の過重を痛感するに至った経緯を示し、理由は三つ挙げられた。「一は 前述の通り、同一の人間が同時に二つの団体の福利を考え行動する二重性格の煩雑さ」、「二は 日宣美の主張するデザイン活動を、我々は支持遂行したいこと」、「三は 二者双立が理想的態勢であること」とし、八名の退会は他の会員に理解され、円満な分立となった。昭和三〇年の日宣美全国展に函館会員八名が初出品して好評を博し、新井静一郎から祝辞が送られたことも影響しているかもしれない。このころ、日宣美函館支部は「日宣美函館連絡所」（以下「日宣美函館」と改称する。昭和三一、三二年頃は角谷が、昭和三三から四二年頃まで羽野、その後は阿部が、日宣美北海道地区委員に選出されている。



昭和33年、日宣美全国展
11月18日～23日、函館[㊦]今井において開催。
〈市立函館図書館蔵〉

品はことし応募した三千余点のうちから入選した百六十三点と全国会員の作品三百二十九点。観光、商業ポスターをはじめレコード・ジャケッ
ト、パンフレット表紙など最近先進国と肩を並べるまでに向上したというわが国のデザインレベルを裏づけ

4、分立後の日宣美函館と函宣美
昭和三十三年、一〇月「1958札幌展」に続き、初の「1958函館展」が一〇月一八日から二三日まで[㊦]今井を会場に開催された。日宣美函館が「地元作家の志気の昂揚を計る」ために、日宣美全国展を招致したもので、「六大都市以外で開催したのは、函館のみとあって世評賞賛を受け」たという。この年の『日宣美全国展目録』によれば、日宣美の事務所は、東京の中央事務所、東京事務所、大阪事務所、中部事務所、九州事務所、北海道事務所の六カ所、そのほかに岐阜連絡所、豊橋連絡所、福岡連絡所、函館連絡所がある。北海道の会員数は、札幌一六名と函館八名、計二四名である。

一月一九日付の「北海道新聞」には「日本の商業美術の第一線で活躍しているデザイン作家の作品を集めた日本宣伝美術会全国展が十八日から函館丸井デパートで開かれた。出



昭和31年、第6回函宣美展
9月19日～23日、**Ⓜ今井**において開催。
〈青木アイ子氏蔵〉

致し、「1953北海道展」を札幌**Ⓜ今井**で開催したのを皮切りに、「1954北海道展」、「1955北海道展」、「1956北海道展」、「1957北海道展」を札幌で開催する。そのほかに北海道地区会員で、昭和二九年には「三色デザイン展」を開催し、札幌**Ⓜ今井**、函館**Ⓜ森屋**、小樽**Ⓜ今井**を巡回し、三〇年には「カレンダー・デザイン展」を開催している。^(17,18)日宣美函館支部の会員は、日宣美展には、札幌に全会員で向かうなどしており、活発化していく二つの団体において、活動を両立することは難しくなってきた。昭和三二年一月、角谷・青木・斎藤喜・鍋島・阿部・斎藤三・羽野・成沢の八名は連名で、函宣美宛に退会届けを提出し、同時に経緯と理由を「退会声明書」(図2)で発表する。

声明書には日宣美の趣旨に賛同し、「函館の後進性を憂うるの余り」に参加したが、「両団体の重要性が日毎に増大す

い函館広告協会と共催し、スポンサー料支払いの件で問題が生じたことなども影響しているのか、協賛者は新聞社・印刷会社・放送局・青年会議所など会社単位となっている。

一方、日宣美北海道地区は、昭和二八年にはじめて日宣美全国展を招

昭和三十三年一月

退 会 声 明 書

函 館 宣 美 会 員

撰記の件に關し、右八名は、ここに署名を以て別紙退会届けを提出し、別紙に於てその経緯と理由を発表し、署名なる会員諸氏の御賛同を得んとするものであります。

かつて我々は、戦後速早く、北海道宣美美術家協団を結成し、本道の先駆者なしたのでありますが、更に親和と研鑽を講じた近代性にも富み、函宣美、結成に協賛を見たのであります。過去数年その会員として、光榮ある函宣美育成に諸氏と共に精力を尽して参り、今や正に振る同志四十餘名と云う地方団体としては他に類のない盛況を誇つて居るのであります。

又一方彼団体たる、日宣美、が全国的組織のもとに発足され、商業デザイン界は、盛衰に昇光を浴びるに至りました。我々は、この機に賛同し、函館の後進性を憂うるの余り欣然とこれに参加し数年を閲して参つたのであります。

然るに近來、この両団体の重要性が日毎に増大するに至り、二つの相似た団体に所屬する所の我々は毎日に不自由と負担の過重を痛感するに至りました。よつて二者択一の境地に立つた我々は、相討り致し、函宣美退会を決定するに至つた次第であります。

その理由の一は、前述の通り、即ち人間が同時に二つの団体の福利を考へ行動する二重性格の煩雜さであります。

この点に關しては、作品の発表會の開催感せられた精神な負担でありまして、特に委員の場合それが顕著であります。

二は、日宣美の主張するデザイン活動を、我々は支持遂行したいこと。

我々デザイン界は、立ち遅れた社会的地位を向上せねばならぬと云ふ懸念があるものであります。日宣美の側面は、敬重団体であること及び機業デザイナーの地位の確立を標榜して立つて居り、近年著しくその実を挙げることまで居ります。我々が日宣美に参加したる目的はこの点にあるのでありまして、特に函館の現状に於て、これが啓蒙改良の必要性は、諸氏に於ても周知の通りでありまして、敢てこれが先駆としての使命を我々は担ふ所にして居ります。

三は、二者並立が合理的な趨勢であること。

我々の協会は、多業種もとのでなく、又日宣美との双立に矛盾も弊害も認められないのであります。むしろそれぞれの純粋な立場を基礎として双立に技術の交流、切磋研鑽されることは、より以上に効果的に發揮されて一段の進境を期待し得るものと確信いたします。

以上述べた点から、我々は、従前なる分立を好むものでは決して居りません。光輝ある函宣美の前途から我々に苦難を分かち合つた同僚諸氏は万感交々とし、愛情の情も又断ち難いものでありまして、變遷が促進、容易にその懸案を決し兼ねたのであります。然し乍ら多士才有為の人材を潤滑しかくの如き美わき出路を持つ函宣美の立場を見ます時、一片の区々たる感傷を抱き、より深い基盤を確保することの重要性を痛感せられるのであります。

幸にして、諸氏の深く厚い御理解を得、我々の懸念をおくみ取り下さつて、旧時の御謙讓下さるんことを幾大の幸いとて、ここに声明書を提出した次第であります。

角 谷 一
青 木 時 雄
斎 藤 喜 久 雄
鍋 島 金 一
阿 部 三 立
斎 藤 三 郎
青 野 野 郎
成 沢 光 雄

図2 退会声明書 昭和32年1月付

〈羽野栄氏蔵〉



昭和30年、第4回函宣美展
4月21日～24日、㊤今井において開催。
〈青木アイ子氏蔵〉

違った意味で人目をひき初日の二十一日から観覧者がひきもきらず好評を博している」と、さまざまな行事のポスターによって、函宣美の活動が市民に身近なものとなってきた様子がうかがえる。

第五回展となる函宣美秋季商業美術展は、一月四日から六日まで㊤今井を会場に、第九回函館市文化祭に協賛して新聞社や百貨店などで設立された函館広告協会と共催で開催された。また、栗谷川健一が観光ポスターとその原画三〇点を賛助出品した。会員数は四一名と増加し、この時点が函宣美最多と思われる。一月五日付の「函館新聞」では、「最近急激に関心の高まってきた伝宣美術だけに会場は熱心な観衆でにぎわった」と盛況な様子を伝える。

栗谷川は、昭和二八年にリスボンでの世界観光ポスターコ

㊤今井で開催された。二二日付の「函館新聞」には、「美術・ポスター展二つ」と題して、同じく㊤今井を会場に開かれた市内学生による商業美術ポスター展とあわせて紹介された。「昨年の北洋博や観光ポスターなどでみがきをあげた腕をふるっての作品は一般絵画とは



昭和30年、函宣美秋季商業美術展
11月4日～6日、㊤今井において開催。
左が羽野栄一、右が栗谷川健一。背景中央には、昭和27年に函館市の依頼を受けて、栗谷川が制作した観光ポスター「はこだて」が展示されている。

〈羽野栄氏蔵〉

委員長という立場であり、道内で札幌以外に支部があるのは唯一函館だけであった。その会員たちが、郷土で独自に活動を展開していることへの激励があったのだらう。また、栗谷川の出品目録には、「懐かしい函館」、「夢を育ててくれた第二の故郷」と記され、凱旋するような特別な気持ちがあったことが伝わってくる。

昭和三十一年は、「新年度第一回函宣美委員会報告」には、「春季函宣美展は四月中旬か下旬に開催すべく目下渉外が会場確保のため折中」とされているが、開催されずに秋季展を迎える。第六回函宣美展は、九月一日から二三日まで、㊤今井を会場に開催された。九月六日付の「函宣美秋季展開催」通知によれば、三日に展覧会開催のための委員会が開かれ、「会場側の都合に依り制作期間が非常に短い」と、急に開催が決まった様子がうかがえる。第五回展で、発足まもな

ンクールに
おいて
「Hokkaido」
が最優秀賞
を受賞する
など国内外
で高く評価
され、この
年に北海道
文化奨励賞
を受賞して
いる。当時、
栗谷川は日
宣美北海道

り、北洋博事務局からの委嘱により、記念たばこ「光」のパッケージデザイン、国鉄車内宣伝用ポスターを全会員で制作している。この年、「函宣美第二回展となる「北洋博商業美術展」は、北洋博事務局と函宣美共催で、二月二四日から二八日まで㊦今井で開催された。ポスターの部は、会員による北洋博ポスター二八点、国鉄車内ポスターのほか、全国学生生徒北洋博ポスターコンテストで八〇〇余点から入選作九点が並び、そのほかパンフレットなどの各種印刷物が出品された。二五日付の「北海道新聞」では、「このうちから各一点を選出し大量印刷して全国に送付する」と伝えている。同日付の「函館新聞」には、「羽野、斎藤両氏のものが構成のよさですぐれている、ついで及川、眞壁成沢の三氏だが成沢のは色感の不足、下辺地球の扱いが疑問、眞壁のデフィの手法をあしらって、達者だが訴え方が稀薄、及川氏の簡素な表現には好感もてる、一般的には盛り沢山過ぎて表現力を弱めているが函館としてこの種の催しが多くなったのは喜ばしい」と寸評がある。結果、好感度の高かった及川の作品が選ばれ、四月二七日付の「函館新聞」では、「画面の中央に、アイヌの首飾りをした熊が立上っているところを描いた郷土色豊かな九色刷りの美麗なもの、さきに全国に配布された人魚を描いた宣傳ポスター（栗谷川健一作）のあとを追ってこんどのものも近日中に全国主要都市、主要駅、商工会議所教育委員会、観光団体その他関係先に送られ宣伝戦の追いこみをかける」と伝えられる。

この年は、続いて、函館市観光課より港まつり協賛行事としてのポスター原画制作、北海道新聞から北洋博のカットを委嘱された。さらに、函館市文化祭共催行事として、第三回函宣美「商業デザイン展」を一月一〇日から一四日まで㊦

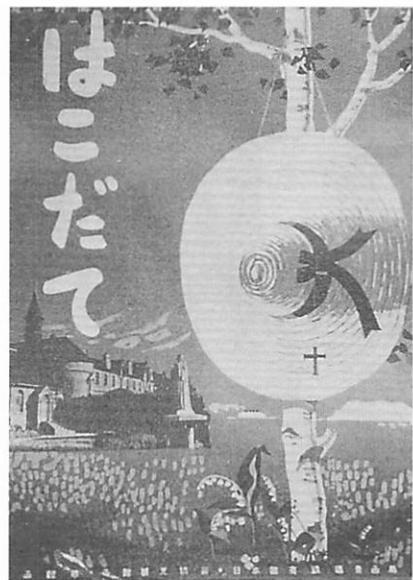
今井で開催している。

このころから、月一回の研究会がハコ印刷で開かれるようになった。会報や委員会報告などの通知は逐次送付され、デザインの公募や会員の近況などが通知された。

このころの会報によれば、一月二八日から㊦今井で開かれた「道新・電通主催第五回全道商業美術展」で、阿部の「フルヤキャラメル」が道新賞受賞し、阿部、及川、羽野が佳作に入選している。第七回函館市成人祭ポスターでは、及川、斎藤三、酒井が入選、道産KKバターキャラメルケースのデザインでは、小番が入選、小番、奥村、渡辺が佳作となっている。翌三〇年には函館市より観光ポスターの制作を依頼され、サイトウリボン社を、翌年には羽野も㊦今井を退社し独立、船木もフナキ芸社を開店するなど、会員の中には個人で看板を掲げる者が増えていった。

このような活動が功を奏して、新会員がたびたび加入し、

翌三〇年、四月二一日から二四日まで、第四回函宣美展が



昭和30年、函館市観光ポスター
原画：羽野栄一
『羽野栄一のデザイン』より転載

発表会も行う。事務所は丸井デパート内」と伝えている。

この年の会員名簿では、「羽野榮一、奥村理三郎、及川久雄、角谷隆一、河村弘、金田喜造、神田正敏、鍋島金一、中尾正、成澤光男、中山清、上山雲照、眞壁ゆきを、小番大治、青木時男、阿部立、笹谷岩男、齋藤喜久雄、三方鉄男、齋藤三郎、菊地武安」の二一名の名前が印刷され、後に「芥川政次郎、西市茂男、勝山正国、島崎清、金田政夫」（同年一月加入）の五名はペンで、「小野 船木」（同年年末加入）は姓のみが鉛筆で書き加えられている。委員は、角谷、齋藤喜、中山、羽野、三方の五名である。最年長の五〇代中山を筆頭に、ベテランから中堅にあたる三〇代、四〇代の北宣美の会員に、一〇代、二〇代の若手を迎え入れ、会員数を大幅に増やしている。会の規約では、目的は「会員相互の研鑽により宣伝美術の向上と相互の親睦を計ること」としている。

函宣美発足の背景には、当然、日宣美、そして日宣美北海道の結成があり、「これにならって長々しい名称を改めた」としている。「函館地方に在住する宣伝美術家を以て組織する」と規約にあるのは、羽野が言うように、「札幌に負けてたまるか、という気持ちも強かった」ことの表れとも受け取れる。一〇月には、「中央との直結を計る熱意をこめて、日本宣伝美術会に入会。旧会員10名のみ承認される」。協年会表によれば、旧会員とは日宣美函館支部創立会員のことで、「青木時雄・阿部立・角谷隆一・齋藤三郎・齋藤喜久雄・鍋島金一・成沢光雄・中山清・羽野栄一・三方鉄男」の一〇名となっており、北宣美で活動していた面々である。彼らは昭和三二年一月に退会するまで、日宣美函館支部と函宣美という二つの団体に所属し、活動することになる。

昭和三〇年版の『函館道南人名録』などによれば、羽野は

日宣美函館支部の会長であり、函宣美の委員かつ代表者として記されている。またここでは、会員には中山清ではなく、小番大治の名がみられる。

第一回ポスター展は、一月一日から一五日まで（今井を会場に二四名の会員が四〇点を出品して開催された。目録には作品名のほか、会員紹介が付されている。個々の会員について、活動がわかる資料なので収録する（図1）。展覧会の様子は、一月二日付「函館新聞」「北海道新聞」に「七月に誕生した函館宣伝美術会の第一回ポスター展が十一日から丸井三階で開かれ人目をひいている」、「同会は去る七月に市内デパート、商店、映画館の商業美術愛好者で組織したもの」と、結成初の展覧会は注目を集めたようである。

「出品作は商品宣伝観光案内から北洋博宣伝などをテーマとして」、「内容は羽野榮一の『酒器』角谷隆一の『観光』勝山正國の『北洋博』小番大治の『北洋サケ』笹谷岩男の『赤い羽根』ほか多数の会員から親しみ深い作品が出品されている」と伝えられ、郷土の作家の手による、郷土を題材としたポスターは市民には好評だったようである。最終日には、札幌から「栗谷川氏外二名」が会場見学および懇談会のために訪れている。青木時雄宛の昭和二九年年賀状に、栗谷川と「ハラダ圖案社 原田英三」のものがあり、前年には交流があったとすると、第一回展には原田も訪れたと考えられる。

函館では昭和二七年に、北洋漁業が再開し、これにより函館港は活気づく。昭和二九年には、北洋漁業再開記念北海道博覧会（以下「北洋博」）が開催されることに決定し、前年から、観客誘致のための宣伝活動が全国規模で展開された。函宣美第一回ポスター展からすでに北洋博をテーマにした出品があるように、北洋博に向けて、函宣美の活動は盛り上がり

会員相互の連絡や情報交換や、地方との格差をなくすために、独自の機関誌『J A A C』が発行され、デザインの普及と啓蒙のために「商業デザイン講座」が各地方で開催された。

日宣美は創立一〇周年にあたる昭和三五年の「世界デザイン会議」、そして東京オリンピックという大きな出来事を越え、朝鮮戦争特需から岩戸景気に至る高度経済成長の波に同調するように発展していった。

2、日宣美結成と北海道のデザイン界

このころの北海道デザイン界は、一九五二年版および一九五三年版の『北海道年鑑』によれば、「創図社、ポスター展、応用美術展などは二十五年から非常に盛会になったのが注目されている」とあるように、新たに「小樽ポスター美術協会」が結成され、北海道電通が北海道新聞社と共催で「商業美術ポスターと写真公募」を始めるなど、団体や展覧会の数が増えているようだ。この後、北海道応用美術協会は梁川剛一が東京に戻ったことなどにより次第に活動が縮小し、三つ葉商業美術会は創図社への入会者が多くなり、実体がなくなっていくようになった。創図社は定期的に会員展を開くほか、観光ポスター展、オリジナルカレンダー展、災害時の救済キャンペーンの協同壁画制作など、疲れを知らぬ活躍ぶりだったという。創図社が勢いを増していく要因には、代表の栗谷川健一が北海道博覧会などの展示デザインを手掛けたり、全日本観光ポスターコンクールで特選を受賞するなどして、デザイン的に高い評価を受けていたことがあるだろう。栗谷川は板橋義夫や山名文夫と知り合う機会を得て、日宣美創立総会に参加し、創図社に日宣美創立会員の山名文夫や新井静一郎を迎えて交歓会を開いた。ここから、日宣美北海道地区（以下「日宣美

北海道」）結成という話が進み、創図社はその母体となった。昭和二七年、札幌・小樽から集まった二四名によって、日宣美北海道が結成された。この結成によって、札幌・小樽で活動していた団体は一つにまとまった感がある。翌年、函館からも一〇名が加わることとなる。

北海道は、東京と比較して戦争による打撃が少なく、作家や画家が疎開してきており、戦後まもなく数々の団体が結成され、地方独自の活動を続けてきたが、日宣美という大きな波に呑み込まれていく。

3、函館宣伝美術会の結成

昭和二八年七月二五日、北宣美は、「函館宣伝美術会」（以下「函宣美」と改称し、新たな団体として発足した。翌日付の「北海道新聞」には、「函館宣伝美術会は二十五日午後六時から丸井デパート会議室で設立総会をひらき郷土の宣伝美術グループとして発足した。市内デパート、商店、会社の美術家二十三名が結束したもので来年の北洋博にそなえて活発な運動を開始するが、年中行事として今年後二回作品



「函館宣傳美術会」綴り
昭和28年創立時の規約から、昭和32年の日宣美会員8名が退会するまでの書類、会員名簿、展覧会目録、会報などを事務局の角谷隆一がまとめたもの。

〈羽野栄氏蔵〉

校時代に、商業美術も学んでいたのだという。仕事上、㊦今井企画宣伝部に入社することもあつて羽野とは面識があり、声をかけられ、北方宣美の会員となつたようだ。

羽野栄一は富良野に生まれ、昭和一二年に札幌に出て、百貨店の美術や看板を請け負う六書堂に入社、その後、札幌三越装飾部に入社している。函館にいる友人が病気で倒れ、三年間の応援を頼まれ、昭和一六年、㊦今井函館支店企画宣伝部に入社する。前述のように、報道奉公隊に入隊し、戦後は再び㊦今井に戻っている。㊦今井の宣伝だけでなく、昭和二三年ころから、函館市の港まつりポスターなども手掛けている。戦前に目立った活動はみられないが、戦後、北方宣美から、函宣美、函館デザイナーグループ、函館デザイン協会と、「名称の変更と離合集散幾多の変遷や紆余曲折を経ていく」なかで、「常にその中心軸として、この集団をリードし支える存在になつていくのである。」^[1]

北宣美は、一九五二年版『函館道南人名録』によれば、事務局は「丸井企画部内」に置かれ、会員は宮下広吉、角谷隆一、羽野栄一、三方鉄男（北海道新聞社内）、成沢光雄（北海道新聞社内）、小番大治（ハコー印刷内）、中山清（ハコー印刷内）、上山雲照（旭中学校内）と会員は減少しているが、活動は続き、昭和二八年、新たな団体へと生まれ変わるのである。

四、日本宣伝美術会と函館宣伝美術会

1、日本宣伝美術会の設立

昭和二五年一月、東京では、かつての「広告作家懇話会」の会員たちが、互いの消息を確かめ、旧交を温めようと集まつた。広告作家懇話会は仕事上で交流のあつたデザイナーや写

真家が自然発生的に集まり、昭和一三年に結成された団体であつた。この場で彼らは自分たちが世話人となつて、東京で仕事をしている、いわゆる商業美術家、あるいは広告美術家といわれる人々を一堂に集め、各人の意見や抱負について語り合い、建設的方向に向かえば新しい団体を結成しようという話になり、翌月には、「東京広告作家クラブ」の名で五五名の作家に通知が送られ、第一回広告作家懇話会が開かれた。この会合は好評で、圧倒的多数が新しい団体の創立を呼びかけ、翌二六年に創立準備委員会が設けられた。準備段階の会合では、「もつと目的意識を明確にし、一種の職能団体として発足すべきだとするもの」と、あくまで作品の質的向上にあると主張する二派に分れてはいたが、内外の情勢と共に商業美術よりもっと範囲を拡げ宣伝美術という社会的な責任の上にたつ仕事をを行う団体として「日本宣伝美術会」（以下「日宣美」）を創立することとなつた。六月に創立総会が開かれ、続いて九月には、第一回東京地区会員展、大阪地区会員展、一〇月には名古屋地区会員展、明けて一月には福岡地区展が行われた。

このころ、日宣美の創立と前後して、旧二科会会員が創立した第二紀会には造型部、二科会には商業美術部が新設されている。この背景には、朝鮮戦争特需によって、経済復興が促進され、商業活動も活気を取り戻してきたことがある。

日宣美の活動は全国的に盛り上がり、各地区の要望を受け、東京、大阪、名古屋、九州、北海道の中央委員で中央委員会が構成された。当初は会員展のみであつたが、三年目から公募部門を設け、新人の登竜門としての権威が大きくなり、各方面から注目を集めるようになる。日宣美は戦後初の全国的な組織となり、活動が活発化するにつれ、会員数も増加し、



昭和26年、〔警察展〕、会場不明
「警察展?を請負った宮下広吉君と警察の係り
面々昭・26」と記されている。前列左端が羽
野栄一、隣が宮下広吉。

〈羽野栄氏蔵〉

善三郎に師事する。二三歳で独立美術協会展初入選、その後は専ら商業美術を研鑽し、終戦後は函館に戻る。昭和二四年当時は独立美術協会々友、北海道移動美術展覧会代表と記されている。前述のとおり、昭和二二年には「かつて東京都嘱託として十七年の圖案経験を持つ」とされているので、東京では都の嘱託職員として働きながら、画家として制作活動に励み、おそらく東京大空襲などによって、函館に戻ることになったのだろう。

函館に戻った後も独立展には出品しており、昭和二二年五月一五日付の「北海道新聞」には、「二十二年度独立美術展に函館の一洋畫家によってかかれた函館港の美景が入选した、それは市内堀川町二十番地宮下廣吉氏(三八)の作品で、冬の波止場」と題する風景である」と入選作の写真入りで伝えられている。

の「ポケット自叙伝」欄で紹介されている。宮下は石狩に生まれ、幼少の頃に函館に移り住む。若松小学校を卒業後は漁師として働いていたが、親の反対を押し切り、二一歳で上京し、児島

北海道移動美術展協会は、昭和二四年版および二六年版『函館商工名鑑』では、広告、宣伝、企画、ポスター、図案、看板などデザイン全般を手掛ける団体で、東京と札幌にも事務所があり、代表者として宮下の名が確認できる。当初、北海道移動美術展協会事務所は時事通信社内に置かれていたが、後に宮下の会社に移ったようである。また、昭和二九年版『函館商工名鑑』には、「宮下宣広社」という看板塗装、宣伝美術、ネオンサインなどを手掛ける会社の代表として、宮下の名が確認できる。この会社は、設立が昭和二三年となっていることから、北海道移動美術展協会を改称したものであることも考えられる。『北洋博写真集』には、指定装飾業者の一つに「宮下宣工社」の名がある。ここから宮下は昭和二九年ころまでは函館で活動していたことがわかる。

しかし、翌三〇年一月九日付の「北海道新聞」には、皮革業者が札入れの宣伝広告用に作成した模造千円札が悪用された事件で、原画を作成した「画家宮下廣吉(四七)同(台東)区西町一」が送検されるといふ記事がある。宮下は、三〇年には東京に活動の場を移している。

会員にはほかに、デザイン以外の制作活動を同時に行うものがいた。角谷隆一は、昭和二三年に赤光社会員となるほか、行動美術協会、全道美術協会などにも出品し、画家として制作に取り組んでいる。行動美術協会においては、昭和二六年、第六回展で「橋のある風景」が入选、第七回展、第八回展でも入选を重ねている。全道美術協会では、昭和二四年の第四回展で会友に推挙されている。角谷は、昭和一四年に函館商業学校を卒業し、卒業後は実家の材木店を手伝っていた。昭和一七年に中国へ出征し、終戦の翌年に函館に戻り、年末にできたばかりの函館新聞社広告部に入社する。商業学



昭和23年、引揚援護強調展覧会
2月10日～17日、Ⓜ今井において開催。
前列左から、三方鉄男、羽野栄一、不明、宮下広吉、その右後ろが青木時雄。後列左から不明、成沢光雄か、小番大治、中山清、上山雲照、不明。
〈青木アイ子氏蔵〉

いたポスト
ターだが、
わかりや
すく美し
く表現さ
れている
と、北宣
美のポス
ター展の
様子が紹
介されて
いる。な
かでも、
会場中央
に展示さ

れた「紙芝居―実話更生美談「炭やく人」中川巖の念入りな画十六枚」が注目を集めたとされており、北宣美展への中川の出品が確認できる。

五月には、商工会議所主催で、「廣告まつり」と題した商業美術ポスター展が、五日から一二日まで、Ⓜ今井、**ニ森屋**の二会場で開催された。五月五日付の「函館新聞」では、「市内商工業者の依頼で北海道美術家集団と廣告社で作成した廣告美術ポスター百余点が展示されている（中略）この廣告祭が終り次代、会議所では森その他郡部に向き、廣告展覧会と函館特産品展示を行う予定」と伝えている。八日には函館商工会議所副会頭の渡辺孝平、同理事谷弥太郎、行動美術協会々員田辺三重松によって合評会が開かれた。描写力不足などの難点は指摘されているが、「所謂ポスターと言う概

念から一步進んだものも見られてその点でも一般に良い影響を与え」たと評価され、今後の向上が期待されている。⁽¹⁾
クリーブランドとは、その後も商工会議所を通じて文通やポスター交換が数回続いた。同年一月には、ポスターを通じて世界の国々が親しみをもって相互に理解し合うことを目的として、ニューヨーク、ダラス、テキサスなど三五〇の店の一四〇〇のウインドウに日本を描いたポスターを展示した。という手紙が届き、商工会議所は北宣美に制作を依頼した。彼らはこの申し出を快諾し、翌年の二月までに会員一人二点以上の作品を送るとして制作に取り組んだ。⁽²⁾翌三月には函館の観光や特産品を象徴した大型ポスター二〇枚が完成し、三〇日から四月三日まで丸井を会場に一般公開した後、航送されることになった。⁽³⁾戦前は主にヨーロッパの印刷物を通してデザインの情報を得ていたが、戦後まもなくはアメリカのポスターや雑誌などが多量に次々と流入し、その影響は当然大きかったことがうかがいしれる。逆に、アメリカではニッポン・ブームが生まれてくるのである。⁽⁴⁾

北宣美は、ポスター展を通じて、商工会議所などの理解者を得て、その後も活動の幅を広げていくようである。

羽野栄一のアルバムには、「警察展」と記された昭和二六年の写実があり、警察官とともに宮下と羽野の姿が見られる。注記から、この展覧会は、宮下が請け負ったことがわかる。

北宣美は、羽野栄一が中心となってとりまとめ、角谷隆一が事務局的な仕事を担当していたという。しかし、当時の紙面では、発会の経緯やその後の展覧会の請負など、宮下広吉の行動が目立っており、広報的な立場だったように見受けられる。

宮下広吉については、昭和二四年二月三日付「函館新聞」

よびポスター交換を希望するという内容の手紙が届いた。

「この話を最近かつて東京都嘱託として十七年の圖案経験を持つ中島町の宮下廣吉さんがきょ早速會議所から手紙を受取り感謝してやはり圖案家である丸井デパート宣傳部長の羽野さんを訪ねたのが十三日、二人で相談した結果早速市内十四人の圖案家とはかり、「市内在住のポスター作家十四名はこれを機会にポスター美術の向上を図ろうと、宮下廣吉羽野榮一両氏が發起人となり北方宣傳美術家集團を結成」することとなったのである。一〇月一五日、北方宣美は㊦今井百貨店會議室で発会した。宮下が羽野を訪ねてわずか二日後に四名の会員を集めて発会に至る迅速さは、どれだけ機運が高まっていたかを示すものといえるだろう。

創立会員は「函館デザイン協会年表」(以下「協会年表」)によれば、青木時雄(弘告社)、阿部勝美、上山雲照(函館市旭中学校図画工作科担当)、角谷隆一(函館新聞社広告部)、小番大治(ハコー印刷)、斎藤喜久雄(独立)、寺村鏡蔵、中山清(ハコー印刷図案部)、成沢光雄(北海道新聞函館支社図案課)、鍋島金一、羽野栄一(㊦今井企画部)、三方鉄男(北海道新聞函館支社)、宮下広吉の一三名で、会長は置かず、委員合議制をとっている。彼らの職業は、図1の函館宣伝美術会第一回ポスター展目録の会員紹介から抜粋した。当時の新聞記事二紙が伝える「十四名」は、「発足した時は確か13名の会員であったと思う。戦時中疎開して来ていた宮下広吉や、美津濃運動具店で活躍していた中川巖など超のベテランが入って」と後に羽野が記しているところから、中川巖を含むものと考えられる。

発会と同時に、北方宣美では、「日米交歓港函館貿易ポスター公募展」を一月一九日から二三日まで丸井を会場に開

催し、公募のうえ優秀作品を選出し、商工会議所を通じてアメリカに送付することに決定した。函館市と商工会議所など

の後援を得て、本格的にポスターの公募が呼びかけられた。クリーブランドには意向に応ずる旨の返事とともに、「親密のしるし」として、会員それぞれが描いた道南の風景や事物を紹介する肉筆絵はがきやエッチングが同封された。

ポスター公募展会場には大沼、江差、当別トラピスト、福山城などの観光ポスターほか、カニ缶、ベニヤ板などの産物ポスターなど約三〇点の力作が集まった。昭和二年一月一九日付の「函館新聞」は、「準備している人たちの顔も希望にはりきっている。(中略)珍しい趣の展覧会として人氣を呼ぶだろう」と彼らの熱気を伝えている。

展覧会が終了し、ポスターはアメリカに送付され、翌年二月一日付の「函館新聞」によれば、「函館から送った観光特産品等のポスターが非常な好評を博している旨、三十日(商工)會議所宛感謝状がとどいた」と伝えられる。

この年、協会年表によれば、北方宣美は、「北方」という名称は好ましくなくというアメリカ進駐軍からクレームがあり、協議のうえ、「北海道宣伝美術家集團」(以下「北宣美」と改称する。これは、当時から「北からのソ連の存在を気にしていた」アメリカにとって、「北方」はソ連(現ロシア)を想起させる言葉であったようだ。

ただし、協会年表では、「昭和二三年一〇月二〇日」とあるが、同年二月一日付「函館新聞」までは「北方」だが、二月一日付同紙では、改称した後のようだ。ここには、「函館引揚援護局、北海道宣傳美術家集團共催の「引揚援護強調展覧会」を丸井デパートで開催されるがこれは四階全部を開放した大がかりなもの、展示品は主として同集團十四人の書



昭和19年10月25日、報道奉公隊集合写真、会場不明
「津軽要塞司令部より任命された報道奉公隊の面々前列向って右から3人目田辺三重松。後列3人目が私（羽野栄一）。昭19・10・25」と記されている。羽野の左隣は金子幸正。

〈羽野栄氏蔵〉

術家もかなりいることと思われるが、これに関する資料は遺憾ながらきわめて乏しい⁹⁾といわれるように、残念ながら函館に関する詳しいことはわからない。しかしながら、羽野栄一のアルバムには、「昭19・10・25」の日付で、「津軽要塞司令部より任命された報道奉公隊の面々」という写真がある。戦時中、洋画家の田辺三重松や商業美術家の羽野栄一らを含む報道宣伝をもって報国活動する集団が、函館にも存在していたのである。

三、北方宣伝美術家集団の結成

昭和二〇年八月に終戦を迎え、一〇月には日本美術報国会が解散し、美術界は統制から解放される。「これにより、美術家の自主的聯合團體が新たに生れる模様で、また地方美術の振興を圖るため地方支部設置の聲も高い¹⁰⁾」と伝えられた。翌年には二科会から分裂した行動美術協会が結成され、東京・関西のほか北海道事務所も設けられた。札幌では、北海道美術協会から分裂した全道美術協会が結成され、翌年にはともに第一回展が開催されている。同じ頃、函館では赤光社の再建が図られ、昭和二二年戦後第一回展を開催している。

中央のデザイン界では、昭和二二年二月に「日本広告会」が結成され、商業デザインの向上と無名作家登場を促すために、日本広告会展が開催された⁹⁾。

北海道のデザイン界では、社会情勢が落ち着きを取り戻すと、観光や商業活動が盛んになり、宣伝活動も活発になってきていた。札幌では、昭和二二年には看板工の技術向上を目的とした「三つ葉商業美術会」、翌年には栗谷川健一を中心とした「創図社」、疎開中の梁川剛一や看板業界の人々の「北海道応用美術協会」などが第一回展を開催している⁶⁾。

この頃には函館においても、個々に活動していた商業美術家たちは、街頭で顔を合わせるたびに、グループ結成について語り合うようになっていたという。団体結成の聲が高まってきたなか、一つの出来事を契機に「北方宣伝美術集団」(以下「北方宣美」)が結成される¹¹⁾。

昭和二二年一〇月一六日付の「函館新聞」「北海道新聞」に結成の経緯が記されている。一〇月初旬、函館商工会議所にアメリカ・オハイオ州、クリーブランドの学生ポスターアート展示会から、全国商業、観光ポスター展覧会の出品依頼お



昭和14年、国策強調ポスター展会場にて
6月1日～5日、森屋において開催。
前列左から不明、不明、中山清。後列左から
青木時雄、不明、不明、三方鉄男、小番大治、
不明。

〈青木アイ子氏蔵〉

び中山清より伝え聞いていると青木アイ子氏にご教示いただいた。函館大火の壮絶さを八場面にまとめたものである。また、市立函館図書館に、昭和一〇年に函館市火災予防組合連合会が制作した「噫三月二日 火の用心」ポスターがあり、和讃の八場面のうち四場面が使用されている。これについても、青木の作品か、若しくは、和讃を参考にした人物の作ということになる。

このころ、札幌・小樽方面では、北商美が商業美術を普及するために、年一回の展覧会などを開催していたが、昭和一四年、協会創立七周年記念展では初めて函館にも巡回し、森屋五階ホールを会場に六月一日から五日まで開催している。六月二日付の「夕刊函館タイムス」は、「函館商業美術聯盟では札幌の同志と組んで（中略）『国策強調ポスター展』を開き人気を呼んでゐる」と伝えている。この記事と青木時雄

アルバムの「昭和14年」と書かれた「主催 北海道商業美術家協会 北海道商業美術家協会函館支部」のポスター展の写真とを合わせて考えると、「函館商業美術聯盟」は「北海道商業美術家協会函館支部」を指し、昭和一四年までには函館にも北商美の支部が結成され、この展覧会は単なる巡回展ではなく、一般公募の入選作と札幌・小樽の会員の作品、そして函館の会員の作品も出品した展覧会であったことがわかる。会員は写真の人物を数えると少なくとも九名おり、角谷隆一氏によれば、青木時雄、小番大治、中山清、三方鉄男の姿が見られるという。また、戦後の商業美術に関する新聞記事では、「昭和十年代には、東政二（現札幌、日宣美会員）故平岡守三郎、三方鉄男、小番大治、青木時男らの『北海道商業美術家集団』があつたとされる。北商美の活動は「昭和一六年札幌聯隊司令部後援の『国策強調ポスター展』を最後に中絶した」とされており、函館支部の活動は昭和一〇年代のわずか数年間であつたようだ。その後は、「商美」は戦時中、もっぱら戦意高揚に動員され、津軽要塞司令部お声がかかり、陸軍美術奉公隊の一翼だった」と伝えられる。

状況は次第に緊迫したものとなり、昭和一七年に日本画家報国会、翌年には全美術家を一九とする日本美術報国会が創立され、一方では日本美術及工芸統制協会も創立され、画材等の配給統制も行われるようになる。北海道でも十七年一二月に報国運動を目的とした北海道美術報国会が結成され、それに前後して、陸軍美術奉公隊が各地の美術家有志によって組織されている。陸軍美術奉公隊は旭川師団報道部の指導のもと、札幌のほか函館、小樽、旭川、帯広、釧路、根室などで組織され、広報活動を行ったという。

「軍の報道班に徴用されて、占領地や前線に赴いた商業美

所、弘告社石版部といった印刷会社があり、年代が明らかなものには辻印刷所の昭和五、六、七年、ハコー印刷所の昭和一年であった。各印刷会社が独自に制作していることから、専属の画工がいたものと考えられる。当時の印刷会社や看板店の画工、図案担当については、昭和二八年の「函館宣伝美術会第1回ポスター展目録」(図1)の会員紹介から知るこ

青木 時雄	昭和四年	函館弘告社印刷部入社
芥川政次郎	昭和十年	金盛堂看板店入社
羽野 榮一	昭和十三年	札幌三越装飾部入社
川村 弘	昭和十六年	函館 [㊦] 今井企畫部入社
小番 大治	昭和二年	北海道商報社入社
真壁ゆきを	昭和五年	菊地畫版所入社
中山 清	昭和十七年	札幌北海道石版所圖案部入社
鍋島 金一	昭和八年	北澤樂天漫畫スタジオ入社
奥村理三郎	大正十四年	ハコー印刷合名會社入社
齋藤喜久雄	昭和十四年	同社圖案部に轉入
齋藤 三郎	昭和九年	日本作畫協會入會
三方 鉄男	昭和六年	ハコー印刷へ入社
笹谷 岩男	昭和十四年	日本作畫協會入會
上山 雲照	大正十四年	元第一印刷株式會社入社
	昭和四年	小樽喜信堂印刷所入社
	昭和十七年	北海道新聞社函館支社入社
	昭和十七年	東京PAL創案圖團會員
	昭和十七年	新京滿映美術奉公班々員
	昭和十四年	函館女子高等學校圖畫科担当

※ゴシックは函館関連事項。



「函館大火遭難死亡者供養和讃」火災現場の場面
昭和9年、函館和讃奉讃會発行、弘告社印刷。
〈市立函館博物館蔵〉



昭和10年代、弘告社の展覧会か
左が青木時雄、背景のポスターには
「弘告社美術部」と書かれている。
〈青木アイ子氏蔵〉

このように戦後に宣伝美術団体に所属する人々が、戦前にも、印刷会社や看板店といった業種に就いていたことがみとれる。彼らが職場や同業種の仲間同士で交流を持ち、展覧会活動を行ったことは自然な流れである。青木アイ子氏によれば、青木は、弘告社の仲間展覧会などを開催していたようだという。

このころの印刷物にはほとんど記名がなく、作者は特定できない。また、原画についても、依頼主に納品するもので、作者が保存するという考えは一般的ではなかった。今回、青木は自作に一切サインを入れたりすることはなかったが、「函館大火遭難死亡者供養和讃」(昭和九年、函館和讃奉讃會発行、弘告社印刷、以下「和讃」)の挿画は、青木が描いたと本人およ

函館におけるデザイン団体の活動について

—函館宣伝美術会の結成を中心に—

霜村 紀子

一、はじめに

戦前の商業美術活動について、大正末期に東京で「七人社」「商業美術家協会」などの団体が結成され、彼らの活動が各地に波及し、昭和初期に北海道においても「北海道商業美術家協会」（以下「北商美」）の活動が展開されたことを前回拙稿で紹介した。⁽¹⁾しかしながら、北商美は、主として札幌・小樽の商業美術家の団体であり、彼らの活動を通して函館のデザイン活動について知ることはほとんどできなかった。

今回、当館所蔵のポスターに関する調査から、函館において戦前から活動を開始し、戦後のデザイン団体において活動した中心的人物やそのご遺族の方々にお話を伺う機会を得ることができた。聞き取り調査と資料から、函館におけるデザイン—戦前の図案から商業美術、戦後の宣伝美術、グラフィックデザイン—団体の活動について、昭和二〇年代から三〇年代を中心に追ってみた。

二、戦前の商業美術活動

函館における具体的な活動としては、「図案研究会」が挙げられる。札幌で北商美が創立されたのと時を同じくして、昭和六、七年ころに栗谷川健一が中心となって函館で結成さ

れた。栗谷川が函館松竹座で映画の看板制作を担当していたことから、会員は映画館の看板やポスター制作、印刷会社の画工、新聞社の広告図案などに携わる同業者と考えられるが、現在のところ不明である。図案研究会の活動は、昭和七年に函館の森屋百貨店で第一回「図案研究会グループ展」を開催した以外に情報はなく、中心的人物である栗谷川は翌年に小林多喜二虐殺に憤激したポスター作成により逮捕され、さらに昭和九年の函館大火によって町の三分の二が焼け、松竹座が全焼したため札幌の其水堂金井印刷所に移るなど、自然消滅していったようである。栗谷川は昭和一〇年に辻印刷所の誘いを受け、函館に戻るものの、わずか九ヶ月で画工室縮小のため解雇され、やむなく独立して「クリ図案社」を設立する。看板からペンキ塗り、大工仕事まで何でも引き受けたが、暮らしはどん底で、昭和一一、一二年と札幌鉄道局募集のポスターで一等入選したのを契機に、札幌鉄道局嘱託職員となり、札幌に戻っていく。この間、栗谷川の周辺で新たな団体の結成などの動きは見られない。^(2,3)

この時代、栗谷川以外の図案家は、どのような活動をしていたのだろうか。前回調査した市立函館図書館所蔵のポスターでは、函館のものでは、井筒石版所、辻印刷所、ハュー印刷

市立函館博物館 研究紀要 第12号

2002年3月31日 発行

編集・発行 市立函館博物館
〒060 函館市青柳町17-1 (函館公園内)
TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

印刷 (有)島山印刷
〒061 函館市昭和3丁目12番15号
TEL 0138-42-3835 FAX 0138-41-9702

BULLETIN
OF
HAKODATE CITY MUSEUM

No. 12

Preface

MICHIO SATO, MASAKO KIMURA :

Distribution of Ezo Brown Frog (*Rana pirica*)
in Hakodate and near Hakodate, Hokkaido.
— On the data recorded in 2001. —

AYAKO WATANABE : Thirteen years history of
HAKODATE CITY MUSEUM OF NORTHERN PEOPLES.
— the present condition and problems in the future. —

NORIKO SHIMOMURA : A Study of Designers' Groups in Hakodate.
— focus on the foundation of Hakodate Advertising Artist Club. —

2002

Publisher : Hakodate City Museum

17-1, Aoyagi-cho, Hakodate, Hokkaido, Japan 040-0044

Phone. 0138-23-5480 Fax. 0138-23-0831